

特 13
470

柳直種彦著

正史續編
寶傳

東京書肆
天賜堂發行

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text in a cursive script, enclosed within a decorative border. The text is arranged in several vertical columns.

A large, mostly blank rectangular area on the right side of the page, possibly a placeholder or a faded section of text.

一先するが、礎堅く建固く、いふは又、庫も
 後、世に於て、深遠なる氏が書、鑑たる
 石も、あり、四十、七十の、其の、採り、お、た、り、内
 残、結、成、後、が、拙、き、備、上、編、成、り、よ、と、求、む、こ、の
 切、あ、る、よ、ど、驚、の、化、考、の、趨、向、の、末、を、如、何、形、る
 事、に、自、證、を、し、な、す、月、と、船、に、毎、日、及、庫、に、寄
 巧、を、し、た、る、建、造、し、り、昔、の、書、を、一、書、洞、屋

の、伎、術、も、多、及、み、な、る、こ、の、所、に、於、て、十八、種、よ
 り、十八、ヶ、修、入、し、と、記、す、大、國、國、中、に、在、り、
 一、書、名、の、昔、を、書、す、と、し、り

明、作、甲、申、の、初、を、時、の、の、の、の、
 孤、獨、の、の、の、の、の、の、の、の、の、

柳亭種彦記 

幽谷より出て喬木不遷る。
 春告鳥の初音より待
 る昔の夜討の廻文
 四十七士の流浪の間
 くの奇寒
 地裂の溪
 間ふ挿て妻
 子ふ別る篋子啼
 幾多の艱難辛苦
 て仙岳寺の本堂ふ
 ホ、法華經の声を聞く
 音も高輪の雪晴茂
 計る横州長栖の



段田忠左衛門兼亮

恩賞塚の故事鳥と
 恩も恩愛を知る実母と
 惜む毒婦の如きと義士の
 妻子小比較さへ月鶯の
 懸隔みて
 悪吏
 千里
 成
 走
 お虎
 鳥木小
 懸り椿説の美談み
 反對する勸懲の助たらん乎



悪婦お虎

早稻孫九郎昌秋





嘉年子画

人の多し
 万松の影を
 下りての間の風
 たるみぬ
 たるみぬ
 たるみぬ

柳亭種彦

正史續いろは文庫 第壹輯
 實傳

東都 柳亭種彦編次

○第百八回

よとなしや深き心を無とたし知られて消ん峰の白雪
 との雪お寄る戀に題とる爲家卿が歌よして爰に兩
 國横山町の商人富多屋の悴瀧次郎を骨董の鑒定家服
 部宗伴が娘お糸と戀そめて想ひの積る雪の夜は八文
 字屋が著述の茶人堅氣は有さふな騷からして縁談の
 瞬間は整ひて吉辰を選び婚禮一帯閑醫師の寸白夫婦

寒風さむかぜでも急度きゅうど雪ゆきは成なるたらうヨ其雪そのゆきで思おもひ出だした九くが
十月初旬じゅうごわつしゅじゆんの雪ゆきの茶ちやの湯ゆは招待しょうたいたが縁えんと成なり願ねがひの通とほ
り斯いかう夫婦ふうふはなならきたが該夜このばんの寒さむさといふものも
今いまは忘わすれられないと寸白すんぱくさんが毎度まいど話はなすが彼夜あのばんの事こと
を今思いまおもへた實じつは夢ゆめのやうで可か咲さな騒さわぎさ糸いと御縁ごえんと云い
ものゝ寔まことは奇妙きみょうな神業かみわざたといひますが其御縁そのごえんは付つて
ハ實まことは困こまる事ことだと云いりけて金平戸きんぺいどの十六じゅうろく盤珠ばんじゆの付つた
銀簪かんだしで前髪まへがみの所ところを搔かなかつ俯向うつむかく漣うづ何なんた夫おとこに付つて困こま
るとも如何どうなるものたエ無言むごんてるては解わからないから話はな

して聞せふよ糸「イエ何また次夜のことと致しませう
 瀧「オヤ訝しな事と云ふやアないり夫婦の縁を結んだ
 に付て困るとい氣に障らアな噫解つた此處へ嫁よ來
 る前よ内々私通した情郎でもあつて彼是むづりとい
 一件でもあるのかへ糸「アレまア澤山そんな事を仰え
 やいまよ吾儕よ於ていそんな水性事茶子粒ほど
 も有と致しませんものや何と證據に時々お黠なさる
 のでせうト少と涙ぐむで怨めとさうに顔を見る瀧「是
 さ何も然う腹を立こといなかろうやアないか情夫

がなければないで善が其困るといふ話との跡を聞せ
 ないから氣よ成いナ糸「然うお疑んなさるゝなら間が
 悪いけきども申ませうか瀧「色氣のない話なら何で
 も遠慮なといふが善のさ糸「是は實家の親父よ頼まれ
 た一件でございませよ瀧「フム池の端のお父さんがお
 まへよ何と頼たのだエ糸「斯な事を申ますと實に愠張
 てるるやうで可咲らうでございませがね此方で御出入
 の本所の高野様での御茶がお好て大そう貴い道具を
 召から如何かして御出入よ成て贏たいものだが古い

御出入の他を御門内へ立入る事の出来ない厳しい
屋敷だが今度斯う富多屋さんと御親類も成たうへの
隠さないでも御存知の通り舊く塩谷の家來でいある
と一通りでも迎も御出入と出来ないが如何か旨い手
續きと求めて高野様へ賣物と暮る工夫とあるまいり
首尾のあつたうお聞申て見て呉ると先日里かへり
参つた時お呉々も親父が頼みましたのでござります
誰何を言憎がつてゐるのかと思つたら然いふ商法筋
の周旋かへ夫の嘸迷惑であつたらふ併にお父さんも

先達ての類焼から今度の婚禮何やりやで出費も大方
でいふかふから一贏志たいと仰おやるのも御尤至
極だが高野様の御門の嚴しいの貫お野暮過るよ夫
といふもト低言も成て誰塩谷家の浪人衆が種々身
を扮して讐たと狙撃ふりも知れないといふ御用心た
さうだが池の端のお父さん杯へ去年殿中の騒動の數
年前は道具の鑒定の一件で不首尾になつて御屋敷と
追なすつたのたさうたりと何も今更身を扮して入こ
ひ杯といふ野暮な了簡もあるまいと却て疑ふ所を微

御出入の他も御門内へ立入る事の出来ない厳しい
 屋敷だが今度斯う富多屋さんと御親類も成たうへの
 隠さないでも御存知の通り舊く塩谷の家來でいある
 一通りでも迎も御出入と出来ないが如何か旨い手
 續きと求めて高野様へ賣物とある工夫とあるまいり
 首尾のあつたうお聞申て見て呉ると先日里かへりよ
 参つた時お呉々も親父が頼みましたのでござります
 瀧何を言憎がつてゐるのかと思つたら然いふ商法筋
 の周旋かへ夫の嘸迷惑であつたらふ併にお父さんも

先達ての類焼から今度の婚禮何やりやで出費も大方
 でおかかふから一贏志たいと仰るやるのも御尤至
 極だが高野様の御門の嚴しいの實お野暮過るよ夫
 といふもト低言も成て瀧塩谷家の浪人衆が種々身
 を扮して鬻た狙撃ふりも知れないといふ御用心た
 さうだが池の端のお父さん杯の去年殿中の騒動の數
 年前は道具の鑒定の一件で不首尾になつて御屋敷と
 追なすつたのたさうたり何も今更身と扮して入こ
 む杯といふ野暮な了簡もあるまいと却て疑ふ所と微

塵もないのだから内の慈父さんにも何とか相談して見やうが今差當つて何か賣込たいといふ品でもあるのかエ 糸ハイ取込で居ましたから吾儕もまた見まじななたが此頃大坂の豪商の所から出たのと同業うちの方が持て下りました高金な茶入があるさうでござります 瀧「フム然いふ傳來の品なら無結構な名物であらうが銘ハ何といふエ 糸ハイ笹啼とか云さうでござります 瀧成ほど口切の茶の湯遣ひハ面白い名たが一夜明ては可咲しくおいかから早く賣込たいといふも

商賣は其道々たなト感心志ながら少く考へ 瀧お屋敷の御隠居師直様は近々上杉家へ御引移になるよ付て本所のお屋敷の名残よ一會催したいと仰しやるに付て何か是れと御客の目と驚かす程の品があるなら知らせて呉ると商賣違ひの品なか近頃己も茶をばると云所りら御側の驚坂様かお話にも有たが吝嗇家の様で極贅澤な御隠居様たりら迎も並一通りの物でハ納まじないが如何か工風して其茶入を御覽に入ると潮に私の妻の親父でござりますと明白よ申上げて

以後御出入と願ふやうよし度ものた糸然う成ますと
實は結構で實父も大僥倖でございませすと莞爾笑ふ容
貌は未だ聲の發ぬ笹啼の茶入の名さへ忍されていと
ちりしさの彌増ければお糸の顔と覗き込で「黄鳥よ
りも可愛らしいのを糸アレ忌でございませよ此とき
戶外と通る夜商人がおでん爛酒エ熱い」

○第百九回

瀧次郎の只願はお糸と愛す心より父が前と取繕ひ師
直が側去きの鷺坂伴内は賄賂多く贈けられた左よし右

よも屋敷への入難けをど宗伴とやらふ面會せんとい
ふ事よて西兩國の代地なる河長といふ料理屋の二階
迄來りけきを其日の馳走と悉く富多屋の賄ひよて柳
橋で花走の藝者お琴小磯お文お筆などと聘き盃も一
順巡りければ酌の者を一同に席と立せて聲を低伴偕
宗伴老るさいの義の瀧次郎から承知したるが此度上方
より参つた笹啼の茶入と御覽よ入ると縁として自今
屋敷へ立入る舊が鹽谷の家來ゆゑ當時在府の舊藩の
甲乙また舊領の播州赤穂や大坂邊に潜むでる故同



第百九回

寮の舉動と一々吾輩まで知らせもしたり或時の御直よも申上るやうよし度との願ひの此方よても望むところゆる如何よか御前と執成て自今出入と致すやう必ずとも取計らふら瀧次郎も安心さつしやれ貴君様が然う力と入て下されば何でも出来ない事のでござりませんが是が他人の御取持ならお疑ひも御座りませうが愚妻の實父でござりますから必ともよ御心置なく「宗今聳が申上ます通り御出入よさへ相成ますれば舊同藩の事なとの聞込次第お根と探つて

一々申上ませうから其義も付まして宜敷く御執成と
下さりませれば眞も有がたい事とござります 伴何の
兎もあれ肝心の茶入と先見度ものだが宗も其仰が
とござりませんとて是非御一覽と願ひますと古更紗
の帛を纏て二重箱も入たる陶器の茶入と見せてまた
小さな桐の函も入し祐乗の作の獅子の色繪の目貫も
鬘斗と附て宗是の甚だ鹿末な品でござりますが初
めて御目通りと願ひました印まで差上度とござりま
すが御召料も成ますれば有がたふ存じますと聞より

伴内の眼を細くし「イヤ先日も瀧次郎を以て好物の品々を過分くわぶんに贈られたのみならず重ねかさねの心配しんぱいは無用むようよそればよかつたよと茶入と目貫めくわと熟じやくと見て伴「何れも是これは又またとなん結構けつこうの品しななれば御前ごぜんと首尾しゆびよく執成とくせいて御買上ごかひじやうに成なつた所で折々せつせつお茶の御相手ごあひても出でられるやうにしてやらうサア此用向このようむかひが濟すけだらうへの藝妓げいぎ等たちと皆みな二階にかいへ呼入よびいれて苦くるしくない宗伴そうばんも今日こんにちの過あやましてたんと飲のがよいせ宗そうへエ有ありがたふござりほまといふ間まは手てと鳴ならして瀧たき「オイ」皆みななが最もう出でて來きても

い、よ色話いろはなしの濟すけだらうら琴こと「オヤ然さうですか嘸持まもた事でせうねエお浦山うらやまとい磯いそ「それでも鷺坂さぎざかさんと浮氣うきで入いつじやるから何が出來でても直ただよ倦あきておちまひ成なるでは有ありませんか伴「イヤ」吾輩わがはいは於おいてそんな浮氣うき杯さかといふ事を一切いっせつない此節このせうぶは旦那だんなのお相手あひてかた「茶の湯ちやのゆ一三味いちさんまいの樂たのしみさ」女おんな「虚うそをりりお吐つなさいましよお茶よりばまだ御凝ごえいなはる物が幾いくらもありませたらう宗「お茶も濃茶のうちやと數かずふくあがると浮うかされませから御油ごあぶら斷たが成なりませんで伴「老人らうじんまでが愚弄ぐろうても如何どうもならん

て筆夫じやア本とうよお宅よばかり堅固して入つて
 やるのでせか文お宅よばかりといへた富多屋の若旦那
 那ぐらるお堅い方と有ませんねエ瀧とうく此方へ
 お鉢が廻つて來たで桑原く琴ちよいとサ御容子の
 好こと文「オヤ子」サアく何り賑かに弾たくと是
 よりお定まりの坐附も濟て藝妓たちも皆思ひくよ
 心意氣などと唄へたサア己が例の通りカツボレを
 遣て見せやう併に老人の前への甚だ耻入をせと宗「イ
 ヤ其御遠慮のない所が有難いのでござります」琴「久し

振で早く拜見をたぬエと是より手拭を冠り浪々を
 ながら變に氣取て踊る景況の胸の悪くなるやうなの
 を藝者達の可咲さと堪へ磯「イヨく」筆「實に音羽屋丸
 出ただねエ」伴「是で例の祝儀も濟だから更ぬうちよ歸
 宅致さう瀧「只今御飯と差上ますりら最暫時」イヤ飯
 の最ふ御断りだ」文「此お肴の御味折へ瀧「イエく」夫の
 御箸の付たのだから別よ大きな折の御土産が誂へて
 あるのを御供の衆よ渡してお呉よ」伴「イヤ重ねく」宅
 へまで恐入たなア」宗「今日何もお構ひ申上ませんで

却て御迷惑さま「如何ぞお近いうちよ又「穢」せびねエ
 文「アレお浮雲ふでざりませよ」伴「イヤ存外よ酷酷いた
 したハエ 四人 藝者 サヨナラ」下女「今晚の有がたう 皆々サ
 ヨナラ」と送り出されて鷺坂を大喜びよて屋敷に
 歸り其翌日師直の前よ出「兼て申上置ました笹啼の
 茶入と則ち持參致しましてござります 師「待兼てゐた
 其茶入ドレ」是へと囊とはづと熟と見て「師成ふど
 是と無類の各器だ百圓なら高くいな」伴「實價百圓
 の儘でござりませる上に持主の宗伴り以後お出入よ

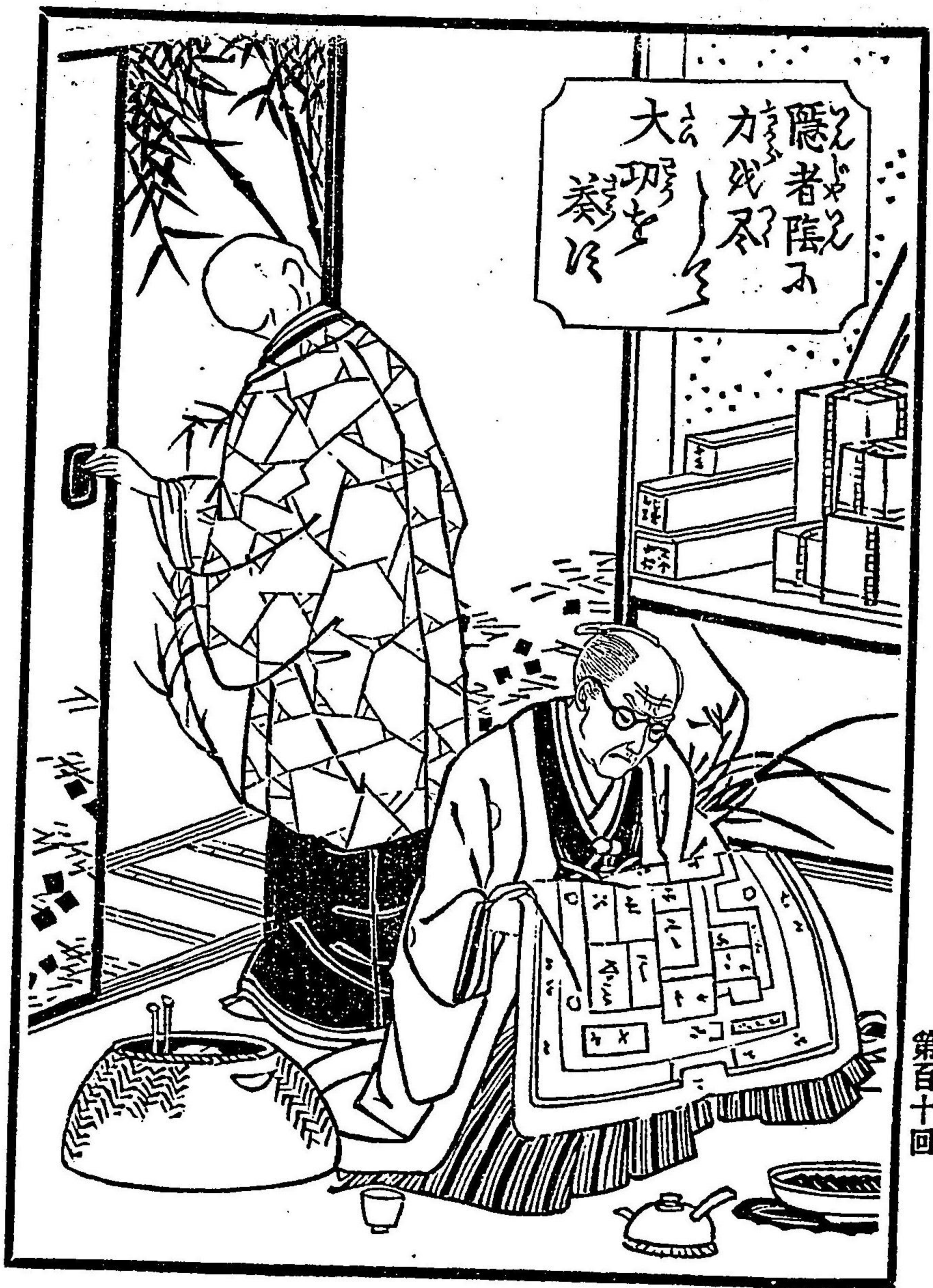
相成ますま右のお禮と冥加の爲に半金は獻納と心
 得て五拾圓よ働さまと申ましたが實よ驚く程廉な
 物ではござりませぬか未だ其上に宗伴と御出入よ仰
 付らまは御都合のよい事ござりませ 師「フム屋敷
 にとつて都合のよいとは「其都合とは箇様なとけで
 ござりませと耳に口よせ明やけハ師「そんなら當家の
 犬と成て大星初め浪人どもの所行と探索致して呉る
 か「伴「左すれば至極の御便利と存じませると勸める家
 來も眼前の利慾あ心と惑はさせ遂に笹啼の茶入と買

上たるを縁とて間もなく宗伴の門の出入を許され
 折々の奥へも出られる身に成しうは素より武家の上
 りめて學問もあり和歌をも嗜み殊に商買上手で世事
 賢く骨董の鑒定も委しなれば忽地は師直の氣に入
 て遂に茶の湯の催し毎に勝手と働く程に成りも皆
 瀧次郎が盡力なりとて宗伴夫婦は只願ふ其厚志を歡
 喜るたり

○第百十回

露分衣干ぞかぬぬると政家卿が詠をたる旅の假居よ

降る時雨の空うち仰ぎ都の方を忍ぶ昔は弓取の矢間
 喜兵衛は商人と姿を變て石町の旅籠屋に逗留せしが
 兼ての覺期に惜からぬ身よも淋しき雨を詫て喜ちよ
 つと入湯をなながら近所で買物を志て來るから同商
 買の者が來たらさう云て置いて下さいと下女に斷り立
 出て十足はりりも行向より宗イヤよ所て矢間氏喜
 是は服部ではあゝ今でも鏢屋宗伴どの打絶て御無沙
 汰ぞ致したるが御家内中御異も御座らぬ哉シテ此雨中
 と何處へお出かけたね 宗實は唯今君の御旅宿を尋ね



第百十回

て参るところさ喜そればく喜丁度よりつたが今般
 拙者が江戸表へ下つた事と如何して御存知で宗され
 バサ先達て上野乃山内で織部老人にお目よ懸り内々
 君の御旅宿を承知致して参りました喜然らば是から
 手狭か旅宿へ御同行致さう宗イヤく御旅宿へ参る
 るよりこ、から直に拙宅へお出と願つて不忍の枯蓮
 に時雨のかゝる景色と御覽では如何なものでござり
 ませう喜いかさま夫も面白からうと幸ひ今日ハ用事
 もなけきは久々で御同行を願ひませうと直に連立て

池の端に至れば主人を一足先へ這入宗「おさめや矢間
さんが御出たよ」オヤ「是は入つしやいまと寔は
御珍らあふござりますサ」如何ぞ二階へ御通り
下さいまじ「然らば御遠慮なしに御免を蒙ぶらう實
よ一別以來貴家でも御變ハなくて結構だ」いつ御
出府でございましてか一向に存じませなんだ「イヤ
是からこそ疾よ伺べきのだが浪人いたあ其後の今
日の活計よ追れ諸方を奔走あてぱり居れば御無沙
汰の段は御免下さい宗「何のく其御無沙汰は御同前

たが昨年こぞの事件じけん以來いらい矢間君やまのきみあハ何方どなたにお住居すまわかと存ぞん
 じてゐたが先刻せんこくも申通りまをす織部老人おのべらうじんよ面會めんかいして御出府ごしゅつぷ
 の様子ようすも知れ頻しきりにお愛あい愛あいく思おもつてゐる處ところで急いそよ御目ごめ
 よ掛り度事かかひごが出来できましたよ付つて今日けふの雨あめゆゑ御在宿ございしゆく
 であらふと存ぞんじ未定みぢやうながらよ石町邊いしちやうへんで御旅宿ごりょしゆくを尋ね
 ていたところ眞まことよ折およくお目めよ懸かつたマア〜何なには
 なくとも久ひさし振ふで寒さむいから何か早はやく持もて來きてくんな
 よさめ「ハイ〜只今ただいま支度しだを致いたして居いりませがお寒さむいか
 ら鳥鍋とりかまよでも致いたませうか 宗むね「鳥鍋とりかまなどもよかるよ 喜よろこ

いやモウ必かならずお構かまひ下くださるな此こゝ二階にかいから見みる池いけの景けい
 色いろが何なによりの御馳走ごちそうだ 宗むね「明あると寒さむくていけませんよ
 火鉢ひばちの傍そばへお出いでなさいましト 宗むね伴ばんは膝ひざを進すすめ 宗むね先年せんねん
 拙宅せたくへお尋たずねのあつた時ときはまだ判官公御存生はんくわんこうごぞんじやうであつた
 が實じつよ何なにとも申上まをすやうもない仕合しあせ明あれはモウ三年
 よ成なりますが實じつよ光陰くわういんは矢やの如ごとくでござるでト聞きて喜よろこ
 兵衛べゑは目めを屢しばしばたぐさいやもう赤穂退散あかほたいさんの一件いっけんは誰たれよ
 でも會あひふとにこて〜悔くみぞ言いれる度ほどに思おもひ出いして
 は悲かなしくなるが別わかけて舊同藩きうどうはんの足下あしもとなどよ昔話むかしばなしとぞ初はじ

めらるゝと唯何事も夢のやうと思はれますで「三年
 前より久くで此家へお尋ね下された時より何か一廉の功
 と立て鹽谷家へ歸參する氣はないか有なら執成を
 てやらふと仰の有たは昔の友誼を忘れず御心切な
 事であると感心と其節の御一言が肝よこたへ今以て
 忘きはおきません 專夫はく唯何心なく申た事をさ
 ほど迄あつくお心に止らるゝは却て赤面至極なごけ
 たな歸參の一件も基が絶ては御同前より残念至極さ併
 と足下などは早くから商業に就たから御不自由はな

あらうが中よりは實に目も當らさない程困窮する者も
 あつて氣の毒千萬さ 宗何事も時節の到來をたので此
 一件は赤穂の藩中一同の天災だから詮方がないと諦
 めるより他はないが其前より退身志たとはいへ此宗伴
 も歸參をする所存のないかと仰る君のれ詞を有
 難いと骨身よ染て思ふほどなきは聊か義といふも太
 そうらしいが骨董渡世の志てゐても何か御用お立と
 ともあらふと君よ御目よ懸つたうへ大事をイヤサ大
 事の道具を唯一品御禮に進上致たいと今日わざく

お迎へに出かけた所さ喜身不肖な拙者如きが御推舉申といつた處か覺束ない話とであつたが足下に其御了簡があつたのなら斷御殘念の事であらふ併に其位の事を申したとて大事の品を禮に報ふなどは如何な品かは存せぬが御無用に成さるがよい折もあつたら又頂戴する時節も御座らう宗イヤく是は如何あつても差上ねバ心が澄ぬから御辭退なとに受て下さい併に斯うな話とがまじめに成ては氣が詰つて酒も旨くあいからモウ一盃温い所をお重ねなさいと喜兵衛

が盃へなみくついで身を起し袋戸棚の内より姫路革の手文庫を出し帳面類や反古の下から紙に包む物を取り出し喜兵衛に渡して聲を低め宗唯今進上おたいと申した品は君御一人ばかりでなく亡君の御恩を忘れぬ大星殿を始と忠義に凝た方々へ今の鏝屋宗伴で有名な昔年の同藩服部右内が進上致す此一品御覽の上で御受納下さい喜亡君の御高恩を忘れぬ面々へと言はる御志の贈物は何であらふか知らんと上包をとり開き見て思はる小膝を礎とうち喜天晴く右内どの我

々が心中の機密を察して取獲られたる高野家の邸の
 繪圖先で岡野三十郎が同家へ出入の大工より陰に
 得たれど是は其圖の中は書洩したる茶室水屋の雜作
 をのせ數寄屋の庭より馬場へ出る抜道などは誰も心
 の附ぬ新築斯う明細に寫されたは我々が爲の六韜三
 畧如何して是がお手に入れたね 宗此見取繪圖を暗記し
 毎夜ぼつゝ書ました其子細は娘のお糸を嫁よほし
 いと懇望する富多屋といふ町人は代々高野家の用達
 をしてゐるを幸ひ愚妻とも申合せて早速縁談を整

へ其のち笹啼の茶入を高野家へ賣込む爲に驚坂へ賄
 賂を贈り茶の相手にまで出るやうに成た一伍四什を
 悉く物語り夫より同家へ参る度座敷や庭廻りの
 様子に目を注て此通り寫とつたは大星どのを始め
 として忠臣無二の方々が種々變名して追々に江戸
 へ下られる容子といひ他家へも隨身せむ商法の目途
 もなく遊んでゐるは正しく復讐の御企と曉つた
 ゆゑに宗伴も一ツの功を立守ると存じ娘を囮に漸く
 と寫取た此繪圖も亡君へ万分が一の御恩報じと存す

る爲今となつては歸參を願ふ御家もなけきと御存生
 中致せべき御詫に換る此一品諸君が本望をれ遂の後
 は御靈前へ御備へ下さい就ては敵討の御供をも願ふ
 べき處なきと町人と成て老衰と久しく武器も手に採
 せ殊には敵ながら師直も寵愛さきて貰つた物ふども
 ありまをから今更に敵と名乗て坊主あたを振立な
 がら切込といふにけにも行せ又二つは亡君の御存
 生中お暇の出た者が其れ詫も致させよ濫も敵討の列
 よ加はるといふ道理もないから此義も於て願ひま

せんと大星どのへも宜敷やうよ御披露下さいといへ
 は喜兵衛は彌々感心して高野の邸へさほどまで親
 しく出入せさきるとい一向よあらふんたが猶此上に
 も心をつけて師直が在宿日をれ知らせ下さい彌々討
 入の日を決定したらバ容子を聞よ参るでござらう何
 は兎もあれ此品を大星氏よ早く見せて喜させ足下の
 御功勞をも話とませう是と云も笹啼の茶入と義士の
 面々が春を俟れる吉兆のよい賣物をなされたなアと
 喜び勇みて立歸りしが果して復讐の時に至り此繪圖

の爲ために便利べんりよく大功たいこうを奏そうしたるは昔むかしを忘わすきぬ宗伴そうばんが忠畧ちゅうりやくのぞる所ところなりと良雄りょうゆうを始め一同いちどうが只顧ひたすら感賞かんじやうしたりことぞ

此一條このひとくだりまでは前編ぜんぺんの作者さくしや春水翁しゆんすいおきなが趣向しゆかうの追加かきつけにて鏝屋宗伴つばやそうばんが物語ものがたり全く爰こゝに終おはる

○第一百十一回

夜々よよは聞きけ穢多せいたが太鼓たいこ郭公くわくこうと晋子しんしが詠よみと吉原よしはらの柏子ひやくし木きよさへ嘘うそばかり月夜つきよはないと譬たとへたる晦日みそかに切迫せつぱくる更衣らうりかへも可愛かあひい男をとこに浪費らいちやうて中なかは空ひまと重簞かきねだん筭すに寄よか

りつ、情夫じやうぶの便遲たひりまと松葉屋まつはやの遊女あそびめ常盤とこが鬱悶ふさみである所ところへ廊下らうかをばたくと馴染なじみの茶屋ちややの婢女めかけ近かが箱提燈はこひし持もて先まに立た近かおいらんエれ久ひさと振ぶて正たださんが常とこ「オヤ忘わすれも忘わすれないで如何どうしたんですエ頃日このあひだ來待からまちさつてゐましたよ」正ただ「其怨言そのをんごんは百万ひやくまんたら聞きたらふと覺期かくごはして來たが常とこ「オヤ大たいそう善よい心懸こころがけたね種いろ々の用ようがあるから脚夫つひやか京橋きやうはしの方ほうへ出でる度たびに築地つきぢへ廻まつてもらつて手紙てがみを出ださない日はないのたに倦うたとも潰つぶきたとも皆無みなれ返辭へんじなとは實じつに子エこれ近かさん呆却あはれかつた人ひとだ

よとチヨイト突飛せを「是さく己には一言も云せな
 いで然う無法に怒る事はなからふじやアないか此方
 にもいふに言きない難儀な理と云た所が始まらない
 マア左も右も一盃やる事とちやうね近どん何か誂物
 をして来てれくきな「何が好うございませうねエ媚
 妓「常「吾濟は何でも好よ「正「昨今は大ぶん暑く成て來た
 かと極淡薄した物がいとね何か見つくるつて大急ぎ
 で頼むよ「近ハイく畏まりましたト出て行より程も
 なく禿は膳立をして酒を温め頼て誂への臺の物も來



て酒宴しゆゑんのくたゝゝときは例れいの如ごとくなきは省はぶき酒食しゆじきも
大おほかた終おしまりけれを近ちかチトれ方付かたづと致いたせませうト奥おくの本ほん
間まへ床とこを布ふせ羽織はねと衣服いふくをたゝむで廣蓋ひろがの上うへに置おき
近ちかサヨナラ明朝あしたは極早ごくはやく御迎ごむかひに娼妓おんげいれ願ねがひ申ます
と云いつ、茶屋ちやは歸かへりゆく跡あとに二人ふたりは差向さしかひ常盤とこは寐ね
てゐる客きやくの上うへに身みを寄懸よせかて蓆せを吸すつけて出だし常今夜こんや
は大おほそう話はなしが有あから寐ねてはいけないよサア睡ねと替か儼げん
ますよ正ただヨシゝ決けつして寐ねやア志しないよ併しかし聞きた處ところ
が追付おっつけない相談あうだんたらうと察さつするがれ前まへも當樓あうろうで店みせの

筆頭とか夜食とかいふ面で見ると此更衣がむづかしく
 くては外聞も悪く定めて面も立まいが已も塩谷家の
 馬廻役を務める速水正左衛門が耻かしい話したが悉
 皆此樓へ入あけておまつて實の處は指替の大小も疾
 に質屋へ入て今指てるる中具などの竹みつ同様の鈍
 刀と換つてゐるわけだから此更衣は紋付の袴なども
 出来兼る時宜さは是では武士の心がけが濟ぬと我なが
 ら此體に愛相がつきるが借今と成ては如何もおやう
 もなし是といふも到底この常磐といふ古狐も恍惚さ

せらまた故さ常「オヤ止してもお呉よ何度を押をそん
 な音が出るたふ吾儕の方が幾く恍惚させらされたか
 知れやアおないよ是も惚過たのが身の誤りなと思ふ
 が此鏢際よ成てから愚痴らむくいふ事もないからね
 エ正「なごく虚涙を溢して他の情夫よ浪費たのでない
 かエ常「如何すむバ然う憎い口ななふト抓る正「オ、痛
 い先刻から参儼られたり抓られあり大へんよ非道い
 目よ遭ふ晩た常「マア如何でもよみから肝腎の相談を
 身に染ておてをくんなさいよ今も聞通りのわけでい

差誥れ互ひに如何よも法がつかないねと溜息をついて俯向ておる面を覗きこみ正「何もさう弱つたからとて足ねエ金が地から涌もこないから智慧を振つて茲に一つの妙計でも何でもないが塩谷家の御祈願處に眞福院といふがあるが其住職の和尚さんハ舊播州産きで己が未だ幼稚て國にわた時ふんかゝ心易くしたから今でも時々遊びに行て碁の相手などもするが至つて開けた面白い和尚だから眞福院へ泣ついて二三十圓ほど如何かして貰へおれ前の曲た物も出るし茶

屋其外へも少し宛はふりかけなけきを成ないからチト言出すに極りは悪いが翌日は幸ひ非番たから一日碁の相手を勉め好機會を窺て依頼て見やうよ「常」此際で少しでも金策が出来ると都合か好いけきども左う旨く行たらうりねエ「正」行てもいりあいで底が歎つく所だから出家は人を救ふのが役目たから否でも應でも常磐の物前とれ救ひ下さいと無理にも口説つけるのさ「常」何た子エ馬鹿くとい他よ據ろない入用があるとしてもいふわけなら解つておるが常磐の難儀と

救つて呉ろとて淨瑠璃の宗清とやアあるまいと正「フ
 ム宗清で思ひたした若金が出来ないといへば施主の
 ない石塔などは估却せても是非工面とさせるはな常
 「ハ、ほんとうよ何時でも平氣な人だねエ正「オヤ泣
 言相談に夜を更して彼柏子木とモウ大引たせ何に
 ても酒が理に落て折角好心持に成つたのが醒てしま
 つて如何も睡就れさうもないが未だ有なら一盃飲
 てくんなよ常「そきはいい、けれども生憎火が消へ鐵瓶
 が冷たく成てしまつたよいけないねエ正「消たら消た

で禿を起さきともよい冷酒で青つきりとやらかすの
 さ常「それでも冷酒は毒たといふよ正「イヤ是でもれ前
 の了簡ほど冷たくさいかゞ澤山毒よもなるまいよ
 常「エ、又始まつたよモウ好加減におこなさいよと寐
 轉でゐる上へ身を寄かけて白丁かゞ湯吞へ次ぐ正「さ
 うやけに次では溢るせと一息よ飲干て舌打とこなが
 ぐ正「ア、甘露く常「そんなよ飲ではかりおると今に
 酒に中きて血を吐ますよトいふ時に月夜を翹る時
 鳥の聲連子と洩て聞けければ正「フム時鳥か左の耳で

初音を聞と吉兆があるといふから「如何ぞれ金が出
 來ればよいね」と衾をかついで一眠し未だ明ぬ間
 廓を立去一端屋敷へ立戻髪を結ひ洗湯入り又出直
 して下谷廣小路三橋際の駿河屋にて新製の磯邊湯皮
 の折を買て土産とし眞福院へ趣き案内を乞ひ座敷へ
 通つて待間程なく住寺の和尚は出來り「これは
 御珍らしい速水さんは久しく御出がないから若御不
 快ではなからふかと御案事申て毎度お噂を致して居
 る處であつた」正申さけもない大御無沙汰を致しまし

た花盛の頃よ上つた限でござりましたが忽地に一面
 の青葉の景色となり變りれた庭の牡丹が大そう奇麗に
 咲ましたナ家老の大星は此牡丹が大好で國では牡丹
 の大盡たと云れる程でござりまたたが斯な大輪な花
 は見ない様でござりました「和さうく由良之助殿の
 牡丹を愛さつとやる事は御城下で誰知らぬ者もない
 風流なれ人であつた話に紛れて御禮を失念した
 唯今ハ何よりの御土産を頂戴して有難ふ此味は極淡
 薄して一杯の下物には極美品でござるテ」正「お禮で痛

入ました時に大そう日も永く成ましたかゝ何も御用の差支がなくは碁のね相手を願ひませうか 和「イヤ此ごろも徒然でこまつてゐる處へ僥倖れお出久し振で一勝負せひとも願ひ度處たオイ〜華次郎や盤と石と持て來なよト寵愛深き嬖童とよべば華ハイ〜畏まりましたと黄八丈の袷御納戸仙臺平乃袴とはいた大若衆が所化と二人にて碁盤と持來り 華是ハ速水様能う入つとやいまして寔にお遠々しふござりました 正唯今も其お詫と致して居るところ君おもいつも

御異りもなく結構でござります今日も又例の通り御厄介に相成ておやかましてふござりませう 華「旦那もお相手がないので待憧れてれ出でありますた 和「然らば例の通り御免を蒙りますト碁器の蓋とすこし明て見て白石と探さ 正「何のお弱くせよ 和「イヤ優さうよ云ても齒も立ますまいと互に勝氣の石配り 正「斯う繼ぐ和「どつこい然ハならぬト盤にむかへ夢中よ成て三 四番ほど圍むうち申刻の鐘の聞けければ 和「コレ〜 華次郎や御酒の支度をして來ないか勝負に實が入て

嘸御空腹であつたらふに華疾はなぢ支度しどの致いたさせて置置きま
した正たださやうならば先是まづ迄までよして一献いっけん頂いたきませうか
な和わ「サア是これかゝの酒さけた〜と庭にわの牡丹ぼたんを見みながりに
差さつ押おへつ主客しゅかくとも酒宴しゆはんの時ときぞうつとけり

○百十二回

圍碁ゐごの輸贏しゆりょうの時ときを移うつし空腹くうぷくしたる折まじなまは客きやくも主人あにん
も逸い早く醉まよて佳興かきようよ入いりかへ時ときこそ來きたれと正左衛まさざゑ
門かどの四方山よひやまの話はなしの序ついでよ人ひとの貴賤きせんの差別さべつなく年未としまたた若わか
き頃ころおひと戀こひゆるゑよ身みを苦くるむめて可た咲かしき事ことのある

由よしを我躬わがみの上うへをもほのめかして語かたきは和尚しやうさうち笑わら
ひ和わ「速水はやみづさんの如何どうなまつたか例れいよない口輕くちがらよ出家しゆつけ
の耳みみよと聞憎きこひにくい面白おもしろい事ことと仰おほしやるが坊主ぼんずたとても
男おとこなれを昔むかしを隨分ずぶん面白おもしろい馬鹿氣ばかげた事こともまゝしたるが承うけた
まのれば速水はやみづさんの未また御獨身ごどくみんたさうたから吉原きちげんか
品川しんがわか乃な至いたる近所きんじよの局店きやくてんかんどよ御馴染ごなじみが澤山たくさんお嘸ま
有ありままでござりませうと問ときて此方こなたの好よい潮しほと陶斗たうと
と置膝おきひざとよめて正ただ「筒様かづらよ申ましたら何なんたか惚言のろけの
様ようで恐入おそれいるが實じつは北郭きたかくの松葉屋まつばやの店みせで當時とうじ筆頭ひしやくだと

り何とかいふ常盤といふ娼妓に久しく馴染で通つて
 るるうち女郎買の金より誰しも詰る倣ひでいよく
 城が保ち兼此春から大敗北底で極内々なお耻かしい
 話したが實の間近よ成た更衣よ紋付の袴から夏物を
 總て質入と志たり賣拂つたりして志まひ差換の雙刀
 まで手許よいか始末ゆる先方の婦人も着のみ着た
 儘と成て是も勤めて志おられぬといふ大困難で頻よ
 吾輩へ逼る處が如何とやうよも首の振方の付さい騒
 たが借そんならと云て打捨て置た日よの吾輩が獨の



第一百十二回

身を苦しめるだけと身から出た錆と諦めてゐるまゝが
若茶屋や船宿などから重役の方へでも訴へられると
押込よさむるり暇も成か二ツ一ツの大騒動だが是迄
も諸方と借盡した擧句ゆゑ同寮や朋友も如何かして
呉ると頼むたとして相手も成て憫然をくれる人もあ
らざらば此物まへよと進退窮まつて能く考へて見ると
三度の食事も快く咽へ通らない程でござりますすが如
何心配しても法方の立ない處から苦疎焦る旦ら晩
まで酒びたしに成て其日くと送つてゐるまゝが是が

何時いつも成なは全快ぜんくわいをやうといふ目途めとのない大貧病たいびんびやうたから實じつの處ところの今日こんにち御寺ごてらへ上あつたのの少々せうく拜借はいしやくを願ねがつて一時いちじの處ところを救すくつて頂いたき度たいと存知ぞんちましたが儲ま發言いはよきまりが悪わるく先刻せんこくうら搓擲もてたまじたが此大難澁このたんだんじやくの場合ばあひとお察さつし下くだすつて何如どぞ當年とうねんの暮くれまで二三十圓程ほど用立もちだての下くださいますまいり然さうすれば此際このときと一度奇麗きれいに濟すまして以來いらいの謹直きんちよくに務向つとめと勵はげみ拜借はいしやくの所ところは扶持しゆぢ切米きまいのうちから追々おひに返上へんじやうするやうに致いたしますから和わそれの至いたつてお易やすい御用ごようだ君きみとの御幼年ごようねんのうちか

ら格別かくべつに御懇親ごこんしんよもまたさけたと殊ことにお年若としわかの事ことで一端いつたんと誰たれも有ありうちの事ことだから二三拾圓位くわんゐの事ことなれば寺てらも持合もちあせがない迄までも如何どでも御融通ごゆうつう致いたませう遊あその金かねもと誰たれも詰つめるものだから証書しやうしょもなんも及およばせ今日こんにち直ただにでも御入用ごいりやうなうお持もたさいと粹まと通とほて出家しゆつも似合にあぬ言葉ことばに速水はやみは却かへて耻入はり正ただ然さう容易たやすく仰おほしやつて下くださいますと穴あなへも這入はいたいやうと思おもいます漸やつとつとの思おもひで發言いはたのぞ斯速かすすみりに御承知ごじやうち下くだすつたので實じつに大安たいあん心しんと致いたしました和わ今日は如何どいふ機き會かい

だが斯な秘密のお話の出た序だりら拙僧も君お一見
 てお貰ひ申たい品がありませのさ正お品は何たか存
 知ませんが唯見だけなうお易い御用だが何やら早く
 出して拜見させて下さいまは是も實ハ些耻入た極
 内のお話だが今迄此席と酌とて居た嬖童の華次郎
 は十三歳の時から奉公も参て可愛がつて養育してや
 りましたたが今年は既も十七も成ますは是迄も格別
 目と懸ただけも善奉公も志ましたりら何時迄も手許
 へ置いて寵愛志てゐては却つて當人の爲めも成りませ

ねは爰で元服させて或る幕臣の株を買て一家の主人
 に志てやり度と存んじて大方は支度も整のへ此のこ
 ろ雙刀の拂ひ物が有ふ付いて大奮發をして調のへて
 はやりましたたが借切るか切ぬかの所ハ當人は勿論拙
 僧等もは皆無分らぬゆゑ如何ぞ鑑定として下さらぬ
 か正刀劍と見るのハ武士の役目なり殊も此道も大好
 でござりますから能は眼も届きませんが左に右拜見
 いたしませうと和尚の居間へ趣きて華次郎に取出さ
 せ帛と探て拵へより中具と熟と見終りて正是は眞も

結構くよい味ひの相州もの拵付で百圓以上なら決して高い物ではござりません併し切れるか切ぬかは試験て見た上でなれば確とは申さきませんから種々お世話相成たお禮うたく是を四五日拜借して試と致ちて参りませうかね華速水様がお試と下されは同じ頂戴致しかがらも安心して永く秘藏いたさきまそりら旦那様どうぞお願い成つて下さいまし和汝が然う願ひたけきバ素より汝を買て遣た物たりら能いやうにしてお貰ひ申がよい正吾輩が確にお預

申て何れ近日の間は必らず持て来て返上をる迄此鈍刀をお預り下さいと己が差料と取換て暇を告て歸らんとすれば和速水さんマアもつと緩々と志ておいでかさいか先刻伺つた通り種々御心配もある處たか今日直にお持あすつてお遣ひかさいと金三十圓を紙に包み渡せの探て押戴き正何とも恐入ましたがお蔭で危急と凌ぎます証書はいらぬと仰しやるけれどもお硯を拜借して受取りとも鳥渡一筆和イヤくそれは御無用く御實直か所を見ぬけをこそ御用立

たのたかゝ御返濟の期限も御都合次第で苦しむべき
 らぬマア〜持てお遣ひ下さい 正寔に千萬有がたい
 大困難を救つて下さつたので胸が晴々致した爲か大
 そう愉快に御酒が進むで充分に酩酊なりました 和此勢
 ひで直に松葉屋かか 正イエ〜如何致して大切をお
 預り物はあり旁以て今晚は眞直に邸へ歸り明日にも
 諸拂ひを濟せまは跡は必お心を入換へ堅固に務を勵
 みまそのさ 和然うおまは至極重疊たが未た〜お若
 い躰たから悉皆止るにも及ばないが氣を志めて遊ぶ

分には浪費もかし其間には眞面目か所から御内君で
 もお迎へて是非とも堅固に成やうに被成がよからう
 正家内を早く持がよいと勸てくれる者も有ますが何
 をいふにも只今迄の舉動では中々其場合に至りまじ
 なたが是からは必お改心して手堅く務め續きませ
 うと雀躍して住僧をはじめ華次郎等にも暇を告寺を出
 へが快き酔に乗じて寸刻も早く金策の出来たる事を
 常磐に話して安心させんと辻に客待つ竹輿を雇ひ一
 散走に北里へ趣き常磐に會ふて眞福院が異議かく金

を貸たるは案事より産が安いと世の譬にいふ如く
にて大安心を志たといふ始終の話に常磐も共に昨
日の辛苦引かへて今日の歎喜の眉を開き更衣の質受
より茶屋其他の會計やら及遣手等の纏頭まで残る方
かく分ち與へ面白く夜を更となり

第百十三回

常磐が部屋との二階と下遠く隔たる奥の間の若緑と
いふ娼妓の部屋へ引過頃の上りたる客の何方の若殿
かと思ふ計りの大若衆今宵が丁度再會かれは馴染金

はいふも更かり樓中乃者へ惣花を詩散して花美に座
敷を片付閨房に入バ若緑は務の身ながら他の客には
立優る男ぶりかゝ金遣ひ行届たる情郎あまは嬉しと
思ふ情より惚れば何か耻かしく思ふが戀の慣にて此
に至れば娼婦も生娘も亦異りなき思ひの同む彼客も
若緑が行燈に背けし容貌を覗きこみ客貴嬢が私に三
ツ年倍たとお言のま如何も虚言たらうと思ふよ私等
の眼にさへ未だ少女はかれのまかいやうに見えるは
若アレ何たか氣耻かといぬエ如何いふ風の吹廻るか

五六日前に不意と當樓へお上りなつた初會の時から
 何方の若殿様のお忍び歩行かおらまいが如何かおて
 眞宿たいと想つた願ひが成就て吾儕ハ斯を嬉しい事
 有ませんは考へて見ると嬉し過て何たか氣味の悪い
 い怖いやうな心持ですは客ヲヤ私は何も氣味の悪い
 やうな事はおまい積りたが私等は遊びが極不馴たか
 ら怖いとか氣味が悪いとか思はるやうな事が有か
 も知れまいが連と一所に來るといふ事の出来まい身
 分たから詮方おとに度胸で單身で來る事のたが何も

氣味の悪い理はおまいとやアまいかエ若別段に是と云
 て怖い事も懼ろしい事も有ませんが貴君のやうな立
 派おれ方からお茶屋附で幫間か何かも大勢率てお出
 かさるべきとやア有ませんか然を未だ前髪のお有か
 さる位で唯單身で直接でお上んかさるのさへ訝しい
 に万事に行届いておいでおさりがら初心らしい事
 を云ておいでたから氣味が悪いと云ましたのさ如何
 ぞ吾儕の胸に陥るやうに尊家を聞かしておくんかさな
 よ客成ほど茶屋から來かおから怪しむ所は最もたが

今もいふ通り成たけ世間へ目立あいやうにと連さへ
 かしに一個で陰密と遊ばあければ成あい體たか極
 内で住所も明されあいが何れ其うちには自然と分る
 時節もあらふと必ぎ胡亂か者ではあいかから安心して
 末長く呼でおくれよ 若然う反對に出られるから叶は
 かいねエ吾儕のやうな者でも如何ぞ末長くと云たい
 けまども直に倦らまてしまふのさ 客何故く 若夫だ
 つても何樓にり馴染か何かお有あさるのたりら今
 時ふんに斯う遅くお出あさるのでせう 客何さ成さけ

早く來たいけれども其早く來れあといふのも都合
 の悪い體もゑさ然と頓て身儘にかされる先も見えて
 來たから貴嬢の疑ひも今にさりと解るたらうよ殊
 に今夜あどの如何あても外出られあい所たけれども
 極氣の悪くある戯談を聞て堪へられなく成て來たか
 ら夜更の怖さも厭ひせに竹輿を飛せて出て來たのさ
 若眞實よ早く身儘よ成て落付てゐられるやうに成た
 う嬉しかうねエ併とれ客といふ者の如何せ實説の
 事ハ云あいかから當よハ成あいうへよ貴君のやうか優

しい女おんなのやうに艶麗あやめを情人こひびとかんだは尙なほの事ことでと横よこ
 の襟えりへ顔かほを入れて小聲こゑで口籠くちどもつていふ客客「何をいふのた
 か判然まこと分わからなかいよ若若分わからなくつて僥倖じょうせ二度にどいふと風
 邪まじを引ひますとさト莞爾たんごと笑わらふ客客「時にこの店みせの常磐とこねさ
 んといふ媚妓めいぎは幾いく千せんぐらわの年齢としとらたエ若若「廿一二にじふにでも
 有あませうかね客客「御膳ごぜん上等じょうとうといふ容色ようしきかね若若「大おほそうお
 聞きれおさるねエ何なんたか知しらなかい振ふをいして何時いつの間まに
 か丘おか惚おぼをしておいであさるのでいかにいりエ客客「知ちてお
 る位くらから委ましく聞きものかね若若「夫それとやア何故なんぢ根ね穿ほ葉はは

り聞きのたエ客客「そんな穿鑿せんさくはどうでも宜いじやアかいか
 エ若若「そきでも吾わ儕せいの氣きに成なるものを客客「アレ痛いたい若若「御免ごめん
 かさいよ客客「斯なんかに痛いたくして唯ただ御免ごめんかさいで濟たまものか
 エ若若「それとやア治なほして上あるからもつと膚皮くわちへお寄よか
 はいよト他愛たあいもあき口説くちせうの果はの鴛鴦うんおうの衾ふとを重かさね巫山ふさん
 の夢ゆめを結むすび明あきは人の目めに立たて務つとめの首尾しゆびもよからじ
 とて後朝ごあしたの名残なごりの盡つぎとあけれど又またの逢瀬あふせを契ちぎつ、笠かさ
 深く着きて面おもてを隠かくし曉天あけつぎの星ほしを頂いたきて大門おほい口ぐちを立出たち出いで
 り却説こゝに速水はやみ正左衛門まささゑもんの眞福院まんだいんより借得かひたる金かねにて万ばん

事の都合よければ重荷を下し、心地して愉快を極め
 熟睡し枕邊にある土瓶を引よせ酔醒乃水を飲でる
 處へ廊下バタ／＼忙がそとく常磐の蒲團のうへに上
 り常正さん寔にお氣の毒たねエ今夜は生憎名代が立
 込で徐々話しもあておられかいのたよ正忙がしいの
 は何より結構な事でもかいが斯お時に勉強して稼で
 置かいと又後の苦しみが想像れるから此方には構は
 せと早く行て勉めあよ常眞實に蒼蠅けれども勉が肝
 腎たねエ併し今報たのが寅中刻だから追々と順に歸

して來てから緩りと睡やう哉正如何でも宜から早く
 廻つて來あよト相方の常盤を出し遣りし跡にて獨情
 々考へれば眞福院にて酔に乗じ華次郎が雙刀と試験
 てやうんと容易諾に吾差料と差換て預かつては來た
 もの、藁以て造る据物あんどを切た分には確かと
 した試験を遂たとも言ひ難く政府の囚獄にて斬首人
 の有るとき切こそ眞の試験かれど此も大金の費る事
 にて今の貧ある身にていからず又何時の日に斬首人
 のありやあしやも量られぬバ長く預かり置んより試

驗たふりにて其儘に華次郎に返さんか然る時は武士
 の誓ひと詞も偽よて巨額の金を快よく貸與へられし
 住職の依頼を無下にするに似たり不熟に此厄介物を
 預りたるを我かから愚成と悔れども又詮方もあか
 りければ只管意を苦しむるに近年諸方に辻切と稱し
 往來の者を暗殺して刀を試験の流行と吉原堤に多し
 と聞けど多くは寸鐵をも佩ざる町人百姓あんどを殺
 す勇もかく義も知らぬ疎暴の武士の所業と見えたり
 我は勇かさ舉動にあらで腕に覺えの有氣ある廊通ひ

の武夫を相手に撰びて立向ひ日頃の手並を現して華
 次郎が大小の切味を試検るは此曉天と過すべからむ
 と思案疾くも定まりければ遽に思ひ立たる如く手を
 拍鳴して常磐を呼べは廻し部屋より馳來り何だね
 エ例にかい手を敲いて呼立るほどの急用でも出來た
 のかエ貴君先刻ゆるりで行て來いとお言ではあいか
 正「成るほど行て來いと云たに違あいが其急用とい
 ふは常如何したのだエ正「名代の多い晩に歸へらうと
 いふと何んだか嫉妬らしいが實は昨夜眞福院で御馳

走に成たとき大そう酔たものたから大切な御門の鑑
 札を座敷へ忘れて来たが鑑札がなけきは御門を這入
 すと云て夜が明て眞福院へ廻つてゐての屋敷へ歸る
 時刻が後きていけないから未だ暗いけれども今から
 出かけて谷中へ廻り眞福院の門の開のを待て鑑札を
 取て行うと思ふから呼たのさ常「オヤ〜」夫の困つた
 事をおしたねエ御門の札では他の品と違つて打捨て
 せ置れないが御寺よ急度あまばよいが若酔て途中へ
 遺失はあつたかねエ正「イヤ〜」夫は心配はない

和尚と碁をうつてゐる時よ傍へとつて置た紙入の上
 へ慥よ乗て置たものを常「さうなら宜が未だ暗いにね
 エ正「暗いとて淋しいとて二本指ておきは平氣なもの
 たと話ながらに支度を整へ松葉屋を出で茶屋の門口
 をトン〜叩けを家婢は寢惚ながら起出て下女「オヤ
 速水さん何で今時分よお歸りなさるのですエ正「昨夜
 泥酔に成た所から大切な品を忘きて来たのを今から
 行て取て来なけはならないのさ下女「オヤ〜」そき
 は大變ですねエ併し未だ早いから一服上つていらつ

とやいな正「イヤ〜急ぐから上るまいよ誰れも起す
 には及ばないから大小を出してくんか 下女「然でござ
 いませかエお腰は是でございましたかね 正「ア、是た
 く細妻が起たら宜く傳てくれ 下女「又お近いうち
 に是非ねエ 正「二三日うちよ必ぎくるよ 下女「さよなら
 御免なさいまゝ御機嫌ようト潜戸をめて内へ入れを
 正左衛門は華次郎より預りたる大小を腰に佩み悠々
 と廓を出て日本堤を這許彼許と徘徊し天晴筋骨逞し
 き武士の來まかごと待乳の山の曉風に戦ぐ柳の下よ

立て吉原歸の遊客を夫か是かと狙撃ふうち淺草寺の
 卯刻の鐘水田よ澄て響さけり

正史續いろは文庫 第壹輯終

正史續いろは文庫 第貳輯

○第百十四回

後朝の別を知らぬ今一つ虚をも撞や明六つの鐘と
 詠たる狂歌さへ身よ想像る、吉原道よ泣面反甫の名
 さへ憂き隄の上を西へ過ぎ龍泉寺町の方へ行んと深
 編笠よ面を蔽ひし丹前姿の武夫の後を慕ふて馳來り
 と速水正左衛門は身構へしつ此武夫こそ試し者よ屈
 竟の相手ならんと思ひみけれを華次郎が所持の刀の
 目釘を濕し間ひ近く成る儘よ背の方より大音あけ正



第百十四回

刀の試よ足下の命と申受たふ御座ると呼はる聲を聞
 くよりも叶はぬ所と覺期とけん笠脱捨る隙もなく刀
 の柄へ手を懸るを正左衛門は飛込で笠の上より眞甲
 かけて二つになきと切付る刃の冴よ眉間より胸のあ
 たり迄兩段に斷割たれば何かは以て堪るべき腰なる
 刀を抜もやらぬ魂切る聲と諸共よ血煙り立て斃れと
 かば正左衛門は試物の切味よきを喜びて手拭を出し
 鮮血を拭とり死骸の側へ静よ進み割たる笠を取除て
 見よ切れと武夫は豈計らんや眞福院の嬖童菊岡華

次郎ありけきバ叫とばかりに仰天と是は如何と驚き
騒げど唯一刀に切殺したるを蘇生させべき術もなけ
きは茫然として起つ居つ少時考へるたりとが何か點
頭き華次郎が死骸の袖を引裂り懐中して足逸に其場
と立退き眞福院へ至り頃頃は夜も朗かに明渡り門掃
く所化が寐足ぬ面して箒を擔ぎ表門を明し出る所か
きは正「イアレ所化さんね早いね住職は未だ御目が覺
ませんか所「イエ」疾し御起あさきて本堂で朝の勤
行とあさきて、御座ります正「左様ならば庫裏へ參つ

て御經の經のぞ待ませうと上る間もかゝ住僧は勤行
 を果して此方へ來り和是はく速水さん大そりに御
 早いが如何思つてれ出ささきたト云ながら速水が面
 と衣服よ血汐の染たのを見て和ヤアく是は大變く
 喧嘩でもなさきたか面の色も眞蒼で手も足も鮮血淋
 漓マア氣味の悪い如何なさきたのた正「サア此血たら
 けで参つたのは人違へとは云ながら辨駁の志ようも
 ないと只斯斗申ては御分解も御座りますまいから搔
 摘むで一通り申せば昨夜華次郎殿の御遣ふさきた刀

の目利をしろと仰しやつた時よ酪酊致して前後の考
 へもなく何ぞ試験て上ませうと所持の鈍刀と交換て
 指て貴院と出まゝてから遂吉原へ脚が向て例の松葉
 屋へ出かけまゝて拜借の金で諸拂ひの方をつけ貴僧
 の御恩と思ふに付ても御寵愛の華次郎殿の刀を試て
 上度と存まゝした所から此頃流行る辻切をして見やう
 といふ悪念と起し未だ夜の明きらぬ間よ郭を出て辻
 切にもせよ抜合せて相手にでも成程か立派か武士を
 殺さふと存て日本堤よ待てゐると深網笠よ面を隠し

て龍泉寺町の方へ下る武士こそ天晴の男振是を試して見やふと思ひ欺し討ひ卑屈ゆる覺期せしむと聲を掛ると其侍も振かへりながら刀に手を懸る所ぞ一刀に切斃して見れば試しの刀の持主華次郎殿で有ましたゆゑ其場を去り切腹して申分けを致さふと差添の柄に手を掛ましたるが此一條を貴僧まで陳上ねを何ゆゑよ二人が死たか理が分らぬ小生の右も左も華次郎殿の死骸を道路へ晒して置のも不本意ゆゑ一通のお話を致しに参つた此上は最早今世に念い遺事を事も

御座らぬ此場は於て切腹致せど親もなけきは妻もない獨身ゆる言遺すべき事も御座らぬ亡後の御回向は宜くれ願ひ申ますと言つ、手疾く裸脱くつるけ短刀閃と引抜て腹へ突立やうとするを和尚は狼狽て抱き止め和コレく必き短見まいぞヤレ速水さんが死なふとさつちやる皆此所へ來て止て呉ると呼立る聲に驚きて納所飯焚男まで馳來つて正左衛門が持たる刃を無理に掣とり抱き疎縮て動かせねを正イヤく如何ぞお放し下さい止られたとて恩人の寵愛さきる

人を殺して阿容く生ておらませうか 和然う思は
 れるは御尤ともたが貴君までと殺しては拙僧がいよ
 く生てゝ居らぬ夫じやに依て切腹するのは如何
 ぞ思ひ止つて下さい 正小生こそは人殺の罪で命を捨
 ねの成りませんが御院主様が何故に死なねば成ぬと
 仰じやりますな 和サア其理を此和尚が重々の失策ゆ
 る華次郎を殺させたも陳さば拙僧が手を下して殺さ
 せたやうな罪を造つた夫故貴君を殺させては彌く以
 て濟ない理さ 正貴僧が罪を作つたと仰じやるは又如

何いふ事だな 和然を昨晚酩酊の餘り寵愛致す華次
 郎に買て遣た雙刀を御目よ懸た其時よ試験て遣ふと
 仰じやつたは言せと知る生物を殺して御覽なさる
 のを酔て前後の考へもなく華次郎が願ひよ任せ其儘
 お渡し申たのを人よ助ける出家の口から生物の命を
 とつて下さいまこと云たも同様嬖童の愛よ溺れたゆ
 る其佛罰は的面に吾身よ報ふて可愛がつた華次郎を
 殺したは汝に出て汝よ還る此和尚が愚鈍さゆゑ斯い
 ふ事よ成果たのを今更貴君が面目ないとて又切腹を

なさをてい刀の試験を頼むた故に可憐若い者を二人
まで殺すに當つて拙僧が生てい如何もわかれませぬ
華次郎の殺されたのも陳さむ自業自得といふもの此
事よ付ては速水さんを決してお怨み申しもせぬ又華
次郎が親族にも拙僧から説諭して必お恨申しぬや
うよ内済に取扱かいますから切腹は思ひ止まつて先
裸を入れて下さいと涙に昏て住僧が止める詞よ正左衛
門は少時躊躇るたりける

○第百十五回

眞福院は種々に辭と盡して正左衛門が死と禁め涙を
拂つて心づき和速水さんが切腹なさるとして短刀へお
卷なされたのは華次郎が紋付の片袖では御座りませ
んり正如何にも其場で袖を裂り懐中致して参つたの
に殺した證據と二つよい此袖で卷た短刀で切腹すま
ば取も直さぬ華次郎殿の恨を晴を道理にも當らふか
と存知ましたゆゑ血に染た此片袖を引裂つて持て來
たれど段々のお諭しと蒙りましては此處では死にも
死あせぬ時宜寧の事に政府へ自訴して御法の通りの

處刑に成のが却つて滅罪と知らぬ和「イヤ」其罪
 亡とも成さらぬ方が此和尚は却て迷惑致とませぬか
 う人殺の罪たけは拙僧が如何やうか費用も厭はぎ金
 を遣つて是非内済に志ませうと必ぎ心配して下さる
 か夫に附ては華次郎が死骸も捨ては置きあいから門
 前町の家主と所化と二人で日本堤へ急いで行て何者
 の所為か知きませぬが近邊の者が通り掛つて華次郎
 の死骸を見て來たと當院へ報知に來まらたから取敢
 ぎ其死骸を御引渡しを願ひ度と自身番へ懸合て若や



彼是云たならば袖の下の賄賂を遣ふ多少は決して言
かいから先是程も持て行て死骸の所は可哀さふに往
來へ晒さあいやうに直に引取て來て貰ひ度と巨額の
金を所化と家主に渡しければ二人の急いで日本堤に
趣き荒蕪を掛と廻りへ黒山のやうに成てゐる人立を
押分け番人に委細と語り龍泉寺町の自身番に到り町
役人に面談して検屍も受む其儘に死骸引取の事を頼
みとに元祿時代の悪弊にて地獄の沙汰も金で濟は町
役人の計ひにて横死の仔細を取繕ひ所化と家主に華

次郎が死骸を直に引渡しければ人を雇ふて戸板に乗せ眞福院へ持て歸り敷臺の上に擔据きは正左衛門と面目なさに頭を垂て詞もなく消も入たき景状なるに和尚は涙にかき昏て虚しき骸よ取纏り和是華次郎堪忍してくれく何事も己が悪かつた汝を可愛がり過た了簡達ひで此通り佛の御罰を受たのたから速水様ぞお怨み申させ迷ひまゝ往生してくま夫よ付ても先頃りら内々己が眼を忍んでの夜遊びよ出る動靜たかゝ何時ぞも巖く異見をして止させやうかと思つてお

たが又熟考へて見ると己が目よては何時迄も小兒のやうよと思ふもの近年の若い者の色氣付のも早いから何時も己が目覺ぬ暗いうちよ歸る分よは知らない面をして於て遣らふと甘やかした乃が却て其身の害と成て斯いふ果敢ない淺猿とい死やうとする事に成たか是と知つたら雙刀も寺を出てから勝手次第に買せきは宜かつた者を刀を買て遣たのさへ出家がすまじき事で有たど愛に溺れて氣がつかなんたは返すくも己が誤り如何ぞ免して成佛してくき南無阿彌

陀佛く^{たぶつ}と泪と鼻を一所にして^{なみだ}啜込^{すいりこ}く^な歎き^{なげ}果^はと
あらざりしが扱^{あつか}あるべき^あ有^あぎきは正左衛門とも相^あ
談^{だん}じて華次郎が親族を喚寄せ内濟金を多分^{たぶん}と與へて
寺院の内へ埋葬し跡懇ろ^{あと}と吊ひける

斯^{しか}て後速水正左衛門と眞福院が強て止むる詞^{ことば}と
從^{したが}ひ他人と誤認て辻切に華次郎を殺したる事を
深く秘して^{かく}おたりしが隱をより顯るゝいなとと
いふ古語の如く誰云ふとなく塩谷の家中一般の
評判と成じかば重役中も評議の上正左衛門が進^{すす}

退^えを如何はせんと高貞公へ申上^{まをしあげ}る處元來下^{もと}と憐^{あわれ}
みて慈悲深き名君おれば唯穩便^{ただかんびん}と計ふべととの
命^{いのち}と依^よて罪をも糺させ永の暇を賜はり三ヶ月の
間^{あひだ}お身の落付所を拵へ屋敷を引拂ふべと云渡
されけきは正左衛門は頻に身の非と後悔と高貞
公の慈悲深き高恩を感じ指て行べき處はなけき
とも三ヶ月の期限も來りしかを築地の屋敷と立
退^えさける

抑^{おさ}も塩谷判官高貞は多くの家臣と憐みて斯く慈善深^{じぜん}

き賢才ありながら短慮の一癖あるが故に殿中に於て
 刃傷に及び身と亡く家を失ないとは惜むべし爰に高
 貞が短慮豁達なる一奇談を舉れば大坂谷町條上寺町
 に万松山吉祥寺といへる禪宗の精舎あり此の塩谷家
 の祈願所おれを年々鎌倉へ參勤交代に往復大坂の庫
 邸に在るゝ間は吉祥寺へ參詣せらるゝ例なりしが一
 年の四月鎌倉下向し風波穩かからざれば浪花の庫屋
 敷に風待の間た高貞は例の如く吉祥寺へ參詣せられ
 し時に住僧御前に出て「此四五日の暴風で御出船の

御見合せは無から御退屈と察し奉りまを就ましては
 今日能くこそ御參詣の處不時の御入で御座ります
 れば御茶菓子の設けさへ致さず不行届至極で恐入ま
 すが御寛りと御遊びを願ひまをと申し上れを高貞公
 高「イヤ〜」必き響應て呉るか唯今にもあれ風が變つ
 て順風に成を錨を抜て直に鎌倉へ向け走るといふ船
 手の者より申出もあれば食料などの心配を致さぬが
 よいぞ「僧」御構は申上ませぬが御滞坂の御徒然中チト
 相願ひ度事が御座りまするが高「フム願ひと何事た

か速く申せく僧「イエ餘の儀でも御座りませんが當
 寺の表門へ万松山といふ額を懸たふ存知ますが好機
 械で御座ますから御前に御染筆を願度ので御座ます
 高甚た悪筆で愧入けれども苦しからむ容易の頼み
 た唯今此場で直に書かふから大硯へ墨を摺て筆と紙
 を早くく僧「速かに御承諾下さりまして有難ふ御座
 りまゝが御前の御遣料に成ますやうな筆では御座ま
 せぬが高「イヤく夫は苦しくないよ僧「左様御座りま
 すまゝ筆墨は有合せで御免を蒙りませうが大坂市中

とはいへ此邊は甚た片鄙で御座りますれを心齋橋ま
 で所化を走らせまして渡紙を調へさせますから少時
 御休息を願ひ上ますト大急ぎで紙を買に出し桐の白
 木の大机を高貞が前に据て住僧は話しながら大硯へ
 墨を摺溜ると近臣風間大鷲なども共に手傳ひて紙
 の來ると俟うち嘉津田新左衛門前原伊助は息を切
 て馳來り新「未だ當寺に御在で御座りましたか唯今風
 の追手は變り直し御乗船遊ばせば至極の都合と木津
 川口の御船手より火急の注進伊「右に付まして御供揃

ひと悉く整へ置まして御座りませる。高夫は真に好い
 都合格別の骨折太儀くト云つ、筆を墨に染て高コ
 レ紙は未だ参らぬかな。僧最う戻る筈で御座りま
 す。が切角の思召で直に書て遣らふとの仰せで御座り
 ます。りら此圖を外さばに是非今日願ひ度と存知ます
 りら今一ツ鹿茶なりと召上らせて紙の参るを暫時の
 間にお俟下さります様は偏へに願ひとふ存知ます。る
 高筆を揮ふの易事だが順風は帆を揚た此好い機械を
 外すも遺憾と有て紙を買ひ参つた小坊主が戻らねば

詮術もないがト少時考へおたりしが再び筆に墨を染
 て高白木の机の上へ書から脚を拂つて額に成されと
 云つ、桐の机の面は万松山の三字を大書し顧みもせ
 ぎ筆を抛て高御暇申と走出曳せし馬は鞭打て直地は
 鎌倉へ下らまける住寺を紙に書たるより木地に書し
 と却て喜び其儘彫刻師お命じて之を表門に掲げたる
 が目今も同寺に存在せり。高貞が短慮豁達なる性質は
 此一事を以ても証するに足れり

因に日編者種彦明治十七年浪花に再遊せし時

此額字を縮寫して藏せ又同寺に判官公夫婦并に
 義臣四十七名の墓あるを以て嘉永五年二月四日
 義士百五十年忌の時同寺の藏品其他各好事家の
 愛玩する處の義士等が遺墨を展觀せし事ありと
 云ふ義士の遺蹟を好む客若し浪花に遊ぶ日あら
 ば必だ万松山に詣て高貞が筆力に豁氣の溢る、
 が如きを見玉ふべし

○第百十六回

復説速水正左衛門の塩谷家より永の暇を賜りて浪々

の身と落魄ければ谷中の眞福院へ趣きて住寺に面會
 し正時に小生も今度病身だから務まらまいといふ辭
 表を出せと重役から言渡されてとう／＼暇が出まい
 たが之は全く華次郎殿の一件に相違ないが併し貴君
 が大そう金を遣つた夫々を頼み内濟にして下された
 お蔭に家財も其儘下され寛々と屋敷を引拂ふ様に成
 たのも平日から家臣を憐まざる高貞公の御恩なれば
 今更二君に仕へる心も御座らぬから華次郎殿の菩提
 の爲に御弟子に成て出家を遂やうかと存知ますがト



第百十六回

云は和尚は頭を振り和イヤ〜夫ハ善くおからふ九
 族天ヲ昇ると云ハ出家せられた勸め申べきたが拙僧の様
 に年來出家を遂た老僧でさへ先頃のやうお心得違ひ
 をしたのだから君おどは未たお若いと殊に松葉屋の
 おどが在てハ迎も出家の遂らまる者ではなと又二君
 に仕へないといふ立派お士氣が在る程から如何に困
 窮しても商かり農かりで活計續いて泰平の代とは云
 ながら今にもあを驚破鎌倉に事ある時よハ赤穂の御
 人數へ馳加はつて一廉の働きせむたら年來の君恩よ

報ふと云ふもの左もないとて他に主どりもせぬ忠
貞の道と正しておられた上で御詫を願つたら歸參が
叶ふまい者でもないが坊主に成ておまへば最早を
迄の事だから出家するのは思ひ止つて何り商賣でも
おて御覽あさるが好い夫に付てい寔に恥入た事だか
ら今迄お話しも致さかんだが嬖童の華次郎を拙僧の
目から未だ小兒のやうに思つて甘やかして過九に増
長してか雙刀まで買って遣て御家人の株と買って渡さう
と思つておた間に何時の間にか拙僧の手許金を拂々

掠出し根津や吉原で遣ひ捨たのを一向の氣が付すに
 るたが死後に段々取調べて見ると否速以の外を横着
 者で不埒至極な尻が割たが到底欺されておた拙僧が
 魯鈍のだから誰を怨むべき所もかいが然して見ると
 君の御手に懸つて己が所持の刀で身を果したのも拙
 僧を欺した罰かとも思ふに付て此一件で彌く悟と
 開きまじたが然而見ると速水さんは拙僧の爲の善知
 識ともいふべきお人だらお怨申處ではなし華次郎
 の一件で御浪々かさまたのは眞に御氣の毒で何とも

申上やうもかいのさ平イヤ然う仰らられては却て
 赤面をますが人を見懸し由ない者で華次郎殿などが
 格別の御恩を忘却して御手許金を掠めた杯とは意の
 外の事で有ましたね和華次郎が曲つた了簡の對照て
 も速見さんが二君に仕へなにと仰らる御志操に恐
 入る程感服をいたしましたから如何か御浪々中の御活計の
 立やうよして進たいと思ひますから零時考へてお
 たりしが稍有て小膝を叩き突と起て納戸より華次郎
 が筐の雙刀を持來りて正左衛門が前に直し和此刀の

試を願つたのか事の起つた品ゆゑに埋ておまはふ
 か幾ら低價でも賣拂はふかと存知たれど華次郎の一
 件を極秘に致して置く爲に人の噂も七十五日といふ
 餘炎の冷るまでと存知て今日迄も其儘に仕舞込で置
 ましたたが本人が亡なれば出家にも不用な品ゆゑ是を
 君に進上おませうが百二十圓で買入ましたから唯
 今お拂ひに成た處が七八十圓よ成ませう獨身者の
 浪人の必き身の持かい者だから七八十の事で足ります
 から彼松葉屋の常磐とかゞ期明前たといふお話しも

承知つたりら其常磐が出される者から一所に成て好
 た同志の共稼ぎに商賣として外に戯遊をなすやう
 一身を謹むで時節をお待なさらぬりト粹を通した和
 尙の詞に往時赤穂の城下よて道樂者と稱れたる男の
 果と知られたり正左衛門の頭を搔き正「イヤ如何も實
 一何か何まで行届たお詞に恐入ておまひました甚
 た恐縮する理だが然いふ厚い思召を強て御辭退申の
 も却て恐入ますか此双刀を賣却して常磐の體が出
 せまおから夫婦に成て歸參の叶ふ迄は一生懸命に稼

ぎまゝして假令良かい人よもせよ吾手に掛た華次郎殿
 の菩提も旦暮吊ひませう和ナ、然して遣て下されば
 其善根は善よ報ふて頓て歸參の御詫も叶ひませうか
 ら御暇の出たよ氣を落さざよ骨を折て御覽なされと
 和尚の諭しよ感心して正左衛門は其雙刀を貰ひ受て
 賣拂ひに相州物の頃合あるを望む者のありければ
 思ひの外よ賣出して百五十圓に成しうば期明前の常
 磐が體を易々と引せ女夫と成て常磐のお常と改名し
 下谷坂本二丁目の裏手に當る入谷村の借家よ住居簾

細工をして細々と幽かよ暮らるたりけり

速水正左衛門が浪々乃間に鹽谷家滅亡に及びけ
 きは歸參を願ふべき所もかく大さよ力を落せし
 ろど忠義の心を撓む事なく復讐の念を起して諸
 方へ奔走し舊同藩士の舉動に眼を注るたる間よ
 計らざるも舊同僚中にて同胞の如く親み交りし尾
 久田孫大夫に面會し大星始め同盟の義舉ある事
 を密かに告られけきを其盟約に加はらんと妻お
 常を携て京都よ上り折と見合せて山科よ趣き御

勘氣の詫とせんと思ひるたるは由良之助が放蕩の風聞高きと驚き呆れ猪の隈邊の安泊は産業もさく彷徨わたるも又類ひなき士操と云べし

○第百十七回

秋の長夜はさなきだに眠られぬ旅泊に憂き事と聞ゆわびじき東雲の鐘を算へて枕元の提貫入と手近へ引寄せ一服飲で寐返りし正に常もモウ目が覺てるか汝も昔の娼妓と違つて浪人ながらも速水正左衛門が妻と成は婦人し話すも倉忽のやうだが話さねは成ぬ

一大事ゆゑ一應相談して見るが實は薄々推知てるやうが塩谷家の御恩を辨へし忠義の士は敵討の誓ひを立て大星殿を棟梁と仰ぎ一刻も迅く江戸へ下向在て本望を遂たいと思ふ所は肝腎の由良之助殿の分別が變つて頻に奢に長むてゐるとの事だが假令棟梁の腰が抜たればとて忠義は塊まつた武士の意地で敵を討せよと置かいが己も以前に國詰を志した時大星殿は一方ならぬ世話も成た事もあると大事の一件を軽く志く變心する様な御家老でもないと思ふから今



第百十七回

一度大星殿の心底を探ぐつて見度との思ふけれども
 御暇の身の己が行て突然と發言たからとて如何な
 應答とさきる事やら分らないが何と斯くて見ての吳
 まいか常敷から棒と斯くてとと分るかいが如何する
 乃だか話忘て見てお吳な正先兎も角も山科近所へ出
 かけて手蔓を索めて大星の幽栖へ奉公に住込で由良
 之助殿の動靜に氣を注て内心の所を見届て貰ひ度と
 いふ大役だが僥倖と汝の屋敷にゐた時に持た女房で
 えないから山科へ立入る舊同藩の人達も面を互ひに

見知らねば正左衛門が女房と心付く者はあるまいか
ら一生懸命に勉めて見せてくんやよ是此通り手を合せ
て拜むせ常々そまじやア何か之間牒とやういふので云
ハ命がけの勝負たね正敵の中へ紛入るといふのも
ないから露顯した處が殺さまもしまいが中々六か敷
い役と相違はないのさ常々妾も今更で北里に居た時
は貴郎の爲に随分お客を欺いた事もあるが今度の
中々長い間だ虚言を吐通してゐるのだから餘程苦
からふが何事も貴郎の爲だりら妾も武士の女房の手

始めよ一ツ遣て見やうよ正然う潔よく承知して呉れ
 ば有難い今撞たのが本國寺の卯刻だから夜が明たう
 早速一宿を發て密と山科邊へ出かけて見ようではあ
 いか常ア、然う相談が纏つたら速く連れて行てお呉よ
 正併し山科は祇園の嬖童たの伏見の幫間たの好男子
 や意氣の藝人が多く立入る所だから汝も亦他一惚て
 は困るせ常ヲヤ止てれくまよ大事の相談たアね馬鹿
 くとい正是も女房を大事たと思ふからの事さ汝が
 水性でさへかくば斯なに念を入れて心配はしさいけれ

ども常アレ最うそんかよ詰らさい言をかり云て愚弄
 すと妾ハ山科へ行かいよ正夫でハ大變だから何事も
 恐入たと過まるから勘弁して行てくんなよと大事を
 語るも想ひ合ふたる女夫の中は睦ましく明くるを俟
 て朝餐を濟せ二人ハ支度を整へて猪隈の宿を出立し
 途次語らふ相談さへ人や聞かむと氣を配る耳塚近き
 大佛の烟管屋町の薄烟戸毎一朝飯焚ころに向ふより
 來る管笠は是も浮世を忍ぶ身か浪人体の武士が咬へ
 烟管を夫と見て正御無心ながらお火を一ツ拜借を願

ひまをト云つ、笠の内を覗きこみ正貴殿と早稲孫九郎殿では御座らぬか孫「ヤア然いはる、は速水君一別以來拜顔せぬが先御堅固で結構で御座る正存知寄ぬ騷動で昨年以來の御浪々嘸か御難澁も御察と申が實に恐入た事で御座る孫其残念は御同前の事然して速水氏「ハ何御用で唯今か何方へ指て御越かさるト問懸られて山科へ大星が心中を試に行とも言兼て止御覽の通り連も御座つて商業の用向を兼上京致しまゑだが昨日迄に京都の名所も豫め見物と終まゑ

たれば是より大坂へ商用を達に参る所でござる孫然いふ事で御上京で有たか僥倖拙者は當時大坂生魂の表門前に住居致すが所用在て昨夜當地へ一泊致し唯今歸坂致す所ゆえ苦しからぬ御同行致して昔咄と致さふでと御座らぬかと云きて速水は迷惑と實は大坂へ下るとと即席の偽りとも云ねば少時うち案じお常を山科の大星方へ住込せるにも暫くの日を費やさねば成ぬ事ゆえ寧早稻と同行して大坂へ下り渠が心中をも探りて大星が舉動を聞糺さんと思案を定め正

如何いかも仰おほせよ従したがつて大坂おおかへ御同行ごどう致いたす途中ちゆう何かのお話はなを承うけたまつたり致いたしたり久々ひさびさで旅中りゆうちゆうの憂うれを慰なぐさめる事ことで御座ござらふとれ常つねも目配めくばせして早稻わせ孫まご九郎くさうと同行どうかうし互たがひに夫おつとと言いねども忠義ちゆうぎは忘れぬ武夫ぶふうが心こころの澱よどまぬ淀川よどがわの沿岸へりを傳つたふて牧方ひらかたの驛しゆくに來きたれば日ひも西にし山やまよ入い相あ近く成なるにぞ孫まご大坂おおかへ未まだ五里ごり餘あまり今宵こんやの爰こゝに一泊いつぱし久ひさし振ふで枕まくらを双たごべ昔日むかし御殿ごてんへ宿直つとめな様ようお話はなさふでは御座ござらぬかな正ただ婦人かんな連つれゆる途みちも抄はどらぞ御迷惑ごめいわで御座ござらふ若わたらふが男おとこの足あしでも大坂おおかまで

日着ひきよの成なませぬから今宵こんやは終夜語しゆうやごませうと或あるる旅はた舎やよ草鞋わらじと解とけて夜食やしよくの膳ぜんよ對かひけを孫まご御同前ごどうぜんに流なが浪なみ致いたして難澁なんじやくの中なかで御座ござれど久々ひさびさの事ことおれば一盃いつぱい飲のふで御座ござらぬか正ただ拙者うづも左様さように存知ぞんじて居ゐる所手ところ輕かろに一献いつけんやりませうと手を拍たたして正ただコレこゝ女中にようちゆう銚さう子こと持もつて來きてくん女にへエえく畏かしこまりました御下物ごさか何なにも致いたませうか孫まご何なにが出來でるな女に鯉こいか鮒ふなの甘露かんろ羹かみで御座ござります正ただ何同前ごどうぜん江戸えどに居ゐた者ものは上方料理かみかたれうりが口くちよ合あかくて困こまりませが淀川よどがわの鯉こいは又格別またかくべつの美味びみ

だから寒風が立ては時候後まながら洗ひにでもして
 貰ひませうか 孫「イヤ京坂が御不馴の方は御存知ある
 まいが當地では洗ひと申し忘ませむで尋常の刺身
 を造肉と云て酢と懸て喰ますが中々好い風味さ 正夫
 では其造肉と鯉汁で一盃やりませうト尙四方山の話
 のうちみ誂へた下物も来りけむバ献つ酬つ是る間よ
 互に充分酩酊すれば自然と口も軽くなり 孫「ナント速
 水君据つてゐて何や々窮屈むかしの宿直の格で寐
 轉びながら話さふでもないか 正「足を崩したら又格別

酒の美味が出て来たやうだ 孫「然うなう今一盞過ぎさう
 か 正「毎度お酌を恐入たトお常の顔を熟々と見てゐた
 りしが足を縮め居直りて 孫「先刻から憚りばかり願つ
 て居ましたが貴嬢も御酒をお用ひならば一献召上り
 ませぬか 常「ハイ深くは頂けませんけむども折角のお
 陶斗でまから一ツト心よく受て 常「へエ御返盃を有難
 ふ 孫「イヤ是の速かな事たイヤ時よ速水君種々のお話
 こに紛れて尋ねなれたが此お女中は君の令閨かかト
 何気なく問懸きを速水は胸よ一物あきを正「イヤく

此お常と申の拙者が従弟で幼少の折に江戸へと出た
 きど其實は赤穂の産ゆゑ今度の上京を幸ひよ赤穂へ
 送つて参るのさ孫成ほど従弟は女夫のやうにト云か
 けて莞爾笑ひ孫似た事もあればあるもの僕も御存知
 の通り鹽谷家ゝ居た時から今以て無妻で不自由して
 居が近頃御無心千万ながら此従弟子のお常さんと僕
 の妻に下さるまいか常エ、と驚くお常が側へ摺寄
 て眞面目に成り孫イヤ戯談では御座らぬぞ先刻から
 目と注てゐるに容儀といひ立舉動といひ婀娜な所に

上品で江戸風の年増盛り恥かしながら孫九郎が首つ
 たけ眷戀ぬいたきは此女中を愚妻よ下されば直も同
 行して鎌倉へ下り一奉公を望みで御座るが實は先
 刻から容子を見るに若速水君の御家内では有まいか
 と心配して差扣へて居たきど良人のない従弟子と聞
 ては彌く想ひが増りますはエ速水君さへ御承知を
 本人のお常さんには今晚終夜か、つても直ぐも應
 接して是非とも承諾して貰ふと透迄ながら緘黙寄れ
 は烟花の果でも武士の妻お常は勃然と面を赫かくし

常「ハイ妾の様な者を左程迄に御執心なさるのは有難
 ふは御座りますが些妾よは願ひが御座いまして御意
 に従はしません其願ひさへ貴郎が叶へて下さいま
 したら正左衛門が何と申ませうと貴郎の思召通りに
 成ませうよ孫「フム是は又異つたに望み何りは知らぬ
 が其お頼みを僕が承諾致したら今宵直にも新枕して
 友白髪がの末までも變らぬ夫婦と稱れる氣かな常「女で
 すが憚りながら二言と後へは引ませんから願ひは急度
 ね叶へなさるか孫「君ゆゑならば如何様か儀でも必

背きはせぬ積りたが發言て見ぬ事は分らぬ先命づく
 御用の外なら常「其命づくが肝要の望み妾も命が惜い
 ゆゑ此戀は思ひ切て諦らめて下さいましか孫「フム貴
 嬢も命か惜いとば「討ねを成ぬ敵が有まを孫「ハテ扱
 婦人の身を以て敵討の望みとは近頃以て健氣な御所
 存ナント速水君御同前に堂々たる男子と生れて此歳
 月「正イヤ此お常は從弟ではかく實を愚妻で御座まど
 も其御一言が聞たさに最前より物蔭よて相談の上の
 命の所望「孫「其心底は先刻よりの詞の中には顯はきて

かねが僕とても亦此妻君も戀慕あるとは眞の偽り向
 ふよ見ゆる男山の八幡宮も照覽あき敵討の心底を探
 らふと存ぞる爲に大失敬を致した段は眞平御免下さ
 きと詫きはばお常も愧入て常妾こそ一端の腹の立儘に
 言過たのは如何ぞ御勘辨下さいまじ孫イヤく決て
 て御心配ささるな然して今度の御上京も定めて敵討
 の御望みで有ふな如何にも大星殿を始め忠義の道
 を知る者は一味徒黨も同盟して關東へ下向さきると
 聞まじたきを其時こそ御詫を願ふて御供の列にと

存知た甲斐なく棟梁と仰く由良之助殿が變心さきた
 といふ事ゆゑ其心底を探らふと存知て女房を同道と
 家中の人に正左衛門が女房と面を見知らぬを幸ひ
 山科の大星方へ下女奉公も住込せる覺期で夫婦が相
 談を整へ參る途中で昨朝計らぬ貴殿も御出會申した
 のさ孫イヤ御心底感入た在下とても其實は大星が
 舉動を探りに一昨日上京致したきど例の妓樓へ居續
 して先か先へ遊び歩行き山科へ歸宅さきぬゆゑ本
 心の放埒と呆れ反つて七と抛け此上は腰拔武士の指

揮とバ憑みに致さず同盟の者と申合せ鎌倉へ下り本望を遂やうとい存知たなきと又再び思慮致せ目今大坂長柄村に寓居する葭田忠左衛門老人は御足輕頭兼御郡代をも勤めらまき二百石の門閥といひ文武の心がけ篤く博學多才の人物なれは是より長柄の葭田へ参つて忠左衛門の所存を承まはり大星に代つて棟梁とも頼まふと存る所をきは速水君も是より直に葭田へ御同行なさらぬかと世に頼母とさ朋友の詞に喜ぶ正左衛門はお常を山科へ入込する計策を轉じ早稻

孫九郎と同道して牧方の宿を立出ける

○第百十八回

速水夫婦は早稻孫九郎が異見に従ひ其日の午後攝津國西成郡南長柄へ行んとせ途中にて計らぎも岡野琴右衛門若村甘助へ行遇ければ孫「コレハ」御両君よは何れへ御出向なさるゝ歟拙者は例の一條に付昨日京都へ参つた所彌々不都合至極の事ゆゑすて立歸る途中是ある正左衛門殿に出會ひ同行致して只今是より南長柄へ参る所是には種々話も御座れど

何といふにも爰の往來まづく此方へ御出かさきと
 孫九郎の人なき物蔭に岡野若村の二個を招き詞短か
 に正左衛門が忠義の志をも語り棟梁と頼む大星が
 全く變心と見認めし上の葎田忠左衛門が所存を聞て
 鎌倉下向に及ぶべき臍を堅める心得で御坐ると話せ
 は岡野若村も言合さねど葎田が寓居を訪ふ所存にて
 來りしとて速水正左衛門も久々にて面會せし口誼
 と陳べ交るくは忠義の志と賞と正左衛門は婦人
 を連て行くも如何なりとてお常を天満邊の旅店に待

せ四人打連立て南長柄へ至れば千萱茂りし片在所宿
 の葎は開られて燈蔭も暗き南窓名は隠なき梅が香
 を慕ふて來かき鶯塚の邊の關を打叩けは折しも主人
 は在宿にて忠イヨ是はく早稻岡野若村君に連らま
 ての速水君は殊に珍らしい御揃ひでの御來臨は何か
 御用が有ての事かな孫如何にも筒様お打揃つて夜分
 出ました理と申すはナア岡野君琴兼て復讐同盟の棟
 梁と仰がる、大星殿が先達て原斧寺の両氏を以て神
 文と返濟せられし後いよく酒色に溺れ驕奢に耽り

以の外の不行跡迎も鎌倉下向の義は思ひも寄ぬ様子
 かれは元來決死の我はかり鎌倉へ下向致さふかと
 屢々評議の集會致し猶昨日も早稻君を頼み今一應由
 良之助殿に面會してと存せし處例の揚屋に沈酔して
 更に面會致さぬとの事ゆゑ「我はも殆ど當惑致し如
 何致さふりと存ざる折節早稻は速水に面會し同道し
 て參る途中四人等しく行合せ額を合せて相談致すに
 孫先頃由良之助殿より一同へ神文を返濟させたる節
 血氣に慄慄る義黨の壯士は皆其神文を引破り搦して

狗の畜生のと大星殿を罵詈訛の中に御老練ゆゑか葭田
 君は差戻したる神文を左も有るべしと心よく受納め
 られたとあるは深き御所存有ての事と考へられまは
 せば一應御相談を願ひ度存じて斯う打揃つて出まは
 たと御勘氣を受し正左衛門が山科へ入込る爲に妻
 と同行したる事まで詳細話せば忠それのく各方の
 御精忠は甚た感心仕る拙者とても別段に深き所存は
 御座らねど返濟致すと云神文を破捨るも益もない理
 ゆゑ素直に受た分の事と云は速水を急立て「貴殿迄

が我々を御疑ひなされてか左様も氣長か事を仰らる
 れど大星氏が變心致せば復讐の義は一同に思ひ止ま
 つて出家遁世でも致さたら宜しからふや併ながら小
 生等は文盲不才の者かきは後世も菩提も辨へませむ
 唯一條も亡君の御遺恨が晴したく存ぜる而已なきは
 師直が白髮首を獲るを一日延せば我々も一日生る算
 用の積る恨の遣所も御座らねは是より四人申合せ鎌
 倉へ下向致し孫假令鉄城を構へるとも四人等しく心
 を協せ無二無三に切入て敵を亡す所存で御座れど多

勢も無勢の事あれば仕損じがちの事で御座らふ手を
 虚しく四人共に討死致した其跡は貴殿鎌倉へ御下向
 下されて残る忠義の藩士を指揮し亡君の讐我々が討
 死の無念を御晴し下さるやう偏に願たふ御座ると四
 人交るく拳を握り肘を張て述るを聞て忠如何も
 各方が忠義を磨かるく尖先なきは天道の加護も添ひ
 て鉄城をも突破り必定仕損じられる事を御座るまい
 が凡大義を企てるには緩和の二字を守るが肝要では
 御座らぬか大星が亂行に付て盟約を背いたも其是非

は量知り難し是と異つたお話だが拙宅の門前に在る
 鶯塚は當地よ名高い名所で御座るが慰みに此古跡
 の由来を語つて聞かせ申さふ彼鶯といふ小禽は五
 月に必き音を納て三伏の夏中お古巢へ還り又來る春
 の梅が香よ誘引はきて谷の戸を發し玉の如き初音と
 出すを天下の春とも一聲千金とも詩よも歌にも賞さ
 れて面白みのある鶯の絶き來て啼く此塚の前よ往古
 一人の法師が御座つて道心堅固に菩提を祈り毎日法
 華妙典を讀誦せる事怠りなかりしが此法師が常に籠

の中に鶯を飼ふて耳と樂ませておたを世の人は嘲つ
 て雲井を戀ふ籠鳥の苦志みぞ知らせ生類を飼ふて樂
 みとするは罪造りの坊主でいあると悪い風説の高く
 成たも憎まるゝのも更に厭はぬ様子なれを其法師と
 格別よ心易い人が如何いふわけで鶯を飼て置れるの
 たと問は法師は之よ答へて我か鶯を飼ひ置く事ハ自
 然妙典讀誦に怠つた時には此禽の啼く音を聞て其倦
 む事を催促の教へと存知て飼置ますといふに付て其
 法師の殊勝なる志とも顯はれて初め誹つた人々迄も

皆仰向の心と起し法師と尊び敬まふた所が其因と縁
 空しからず彼法師の幾程もなく宣化られたまふと鶯ハ
 四季ともよ絶ぜ此塚よ来て啼く故に寔に不思議の事
 なりとして鶯塚の名と遺し浪華の名所と相成まらた
 語れを四人の義士等の共に思そせ小膝を敲き孫寔に
 有難い御異見で御座つた正燕雀鵬鵠の心と知らせと
 は我々が事でも御座らふか 智勇も人に優きたとい
 ふ由良之助殿が變心成らふ筈ハあけまど盟約を破ら
 せに依て淺慮の我々ハ心配致した 甘是よと深い御

存念の有た理で御座らふが夫とも知らず祿盗人の腰
 拔武士のと誘つたは誤り此上は如何あつても大星殿
 を大將と仰いで義を重んじ死を極め其の指圖に従ひ
 鎌倉へ下つて時節を俟ませうと云ハ 忠鶯塚の故事に
 擬へた拙者が異見を御用ひ有て大星が指揮に従ひ時
 節を俟と仰ぐる、は至極穩當な御論で御座らふ夫で
 こそ大事も遂らまるといふもの何れもの御所存感心
 致したるが速水君は判官公御在世の折に御勸氣を蒙ふ
 らせられた事なれ此義舉の連判よ未だ御加入をなさ

れまいが妻君までが死を決して山科へ下女奉公に入
 込まふと云れる忠節の御所存は中々感心仕は拙者
 へ明日早朝に出宅し山科へ参つて大星に直々に面談
 し正左衛門殿をも同盟に加へるやうに必き御執成を
 致まで御座らふ「忠義など、申事ではかく唯亡君の
 御高恩と報じ度と存る一心に各方が御盟約の事を薄
 く聞知り及ばせながらも身分たけの力を盡す積りで
 御座つたが大星殿へ御披露有て敵討の御供に表向御
 加へ下さるとは難有い思召宜き様に御推舉を願ひま

すト喜び勇む正左衛門に引續いて早稲岡野若村の面
 々も詞を揃へ「孫」明日京都へ御出とあれを廿四五日
 ち御歸坂の頃を考へ「琴」又参上して御動靜を伺ひま
 せうと慇懃に暇を告て歸り逝ぬ
 此翌日葭田忠左衛門は大坂を立て山科に趣き由
 良之助に面會えて四人の義士が志操を語り速水
 正左衛門をも一味の列に加らせるといふ又粵よ
 載たる岡野琴右衛門を幼少の時九十郎と稱し父
 と銀右衛門と云て鹽谷家よては武勇膽畧衆よ優

れと豪傑かり琴右衛門が話の因は父銀右衛門が
小傳を次回に説く

○第百十九回

當時築地の塩谷の屋敷は程近き芝口邊に一色左京と
稱ふ大名屋敷の物頭小野深之丞が庭先の椽側に集ふ
二人の家婢が里「マアれ谷どん一寸御覽よ隣の猫が晩
夜もまた御池の金魚を獲たと見えて大きな更紗で尾
れ長いのが二頭見えかく成ましたい谷「チャ／＼眞に
見えないから獲れたのに違ひはいよ是が堀抜の深い

池だとよいが浅い漆膠のお池だから猫は懼らるると
金魚も脱る所が無のでせうよ憎らしい猫はつちやア
ない里「速く若旦那様に申上て置ないと又私等の落途
よ成と否は谷然して如何りして其猫を殺して遣度
ねエ里「是迄は猫に獲らせた金魚は皆な高價のたから
大した金目たらうよ斯う獲れても金魚も可哀さうた
ねエト話との間よ心づき谷「お里どんアレ御覽よ彼築
山の槇の木の蔭の石燈籠の上に睡てゐる赤斑が金魚
を獲るのでせないかエ里「成ほど珍らしい大きな猫た

ねエ何たか化さふお位お大さいから彼奴も相違なからふよ疾く若旦那に申上やうとお里お谷は奥へ馳行
 き斯と告げ當家の長男半之助といふは未だ十七の若
 盛血氣に慄悍る少年かれを愛す金魚を毎日毎晩獲る
 を無念よ思ひるたりと所おれば急遽しく馳出て半
 金魚を獲て喰ふ畜生は、彼築山の榎の木の下に
 く見えるのが隣家の猫か里へ迅く行て稽古場に有る
 弓矢と持て来い谷「チャ」貴君弓矢を如何かさいま
 す「半」毎日弓の稽古をしても的や巻藁ばかり射てゐて



面白くもないが金魚を獲る彼畜生を射殺して手練を
試して見やうと思ふのさとお里が持来りし弓に矢を
つがひ満月の如く引おぼりて放てを狙ひは違はなく
石燈籠の上より猫の肋に深く立て聲をも立て轉
くと落る所へ駈付て猫の死骸を視て愕然し半ヤア
是は大變を仕たせ例も金魚を獲に来る隣家の猫を三
毛で尾の先が少し黒いのたが是は赤斑で美しくい緋
鹿子の首環を懸けてゐるうら何處で可愛がる飼猫と
見えるが木の蔭でよく分るかいゆる見過まつてとん

た龜忽とらした金魚を獲からこそ憎いと思つて射殺したれど是は何の罪もなし猫が心よく睡てゐる所を苛く殺すと不便な事をした谷「成程然う仰しやつて見ますとお隣家の赤斑は黒毛が交つて三毛の尾の長いので御座りましたつけ里夫の眞に可哀さふな事をしましたト死た猫を抱揚て里前是は間違たりら如何ぞ堪忍してくれよ谷今更詫ても追付ないねエ半寔は短見て悪い殺生をしたコレく赤や必を恨むで呉るなよ併し斯しても置れまいから仲間を呼で此庭の

隅へ埋させてくれよ谷へエく畏まりました里寔に可哀さふで氣に成るねエと云つ、庭口を明て大部屋より雇僕を喚來り猫を築山の蔭に埋めさせ其日も既ふ昏けをハ半之助は巳が部屋の机の上に書籍を廣け讀かけて晝射殺したる猫の事を考へれば罪もなき猫の心よく眠つておたを殺せしは實に無益の殺生と思へば思ふほど快よからぬ讀書もそこくよ志て臥床に入り寐やるとすれど眠られねば又猫の事を思ひ出と口の内に念佛かど云て頻に後悔してゐたりしが更

行鐘は闐々と聞え四邊も寂寥と静まりて風の音さへ
 物凄けきは半之助と衾ぞうち被ぎて又猫の事を思ひ
 續け心弱くて眠り兼きバ不思議や庭の方に當りて頻
 り猫の鳴く聲のすきを何方からんと夜具を刎のけ耳
 を聳立て聞は初めは庭の築山の後の方にて鳴く聲の
 正しく晝の猫ならんと思へば其聲を漸次に近づき遂
 には我臥てゐる床の下よて鳴く体ゆゑ此は怪とやと
 起出て枕元の障子を明て出れを猫ハ雨戸の外も鳴き
 雨戸を明て出て見れを又築山の向ふにて鳴くよぞ手

を拍て下女を呼び半「コレ」谷や部屋の者ぞ一個起
 して来て庭の築山の向ふと見廻らせてくんなよ頻に
 猫の鳴く動靜が晝間殺したのが土の下で蘇生たので
 いかいりと思ふから谷「チャ若旦那様の訝を事と仰し
 やりませ何處も鳴てゐるかいでは御座りませんか
 半「イヤ」汝が寐惚てゐて耳が聞えかく成たのたら
 うアレ彼通り鳴てゐる早く見廻せかといふよ谷「ハイ
 ー」畏怖りましたたが地の下で鳴ので御座りますま
 いト云つ、一個の雇僕を起し來り庭の隅々を見廻ら

せたまはど猫も見えぬは聲もせせ折助は不審か面をし
 て折れた庭の隅々を探しましたたが蜘蛛の巢の外に何も
 御座りません半「何もかい筈はないが寐をば椽の下で
 鳴やうたから箒を以て椽の下へ這入て探して見てく
 んかよ折夫は大變を騒ぎたが御氣も成から這入ても
 見ませうがお谷どんは此沓脱石の間に蹲踞で提燈を
 見せておておくんなせエ半「イヤ其提燈は己が持てる
 るから早く這入て猫がゐたから追出てくんなよ折如
 何も私にも聞えませんりらおさうも御座りませんが

先這入て見ませうト少時有て這出と折何も居の致と
 ませんせ半「フム諸方で鳴くやうたから何處よゐるの
 たか一向よ分らかいで困るが捨て置は寐らまかいと
 谷モウ唯今寅刻を報ましたから頓て夜が明ましたら
 何處よ居るり分りますたらう半「夫でも汝等は先一端
 引取て眠として翌日の朝は極早く來て是非猫の所在
 を探つてくんかよと該夜も毫も目睡まで明るを遅と
 と待構へ家の周圍を探さまたれど眼に遮る者もかけ
 れども半之助が耳に猫の聲の止む時あきよ怖まぞ

かゝ衾打かつぎて起出ねは父深之丞と枕元よ來たり
 深之丞半之助貴様は氣でも狂ひさせぬか委細の事故
 と里と谷とに聞たが見誤まつて射殺さまたとて猫が
 魅入く道理はかいから氣を確に持て起て見るが宜い
 然うすれば物よ紛まて猫の聲かどがする者ぞのかい
 半へエ然いふ答の有まいとぞ存知て居ますが今日と
 又斯うれ話をとてゐる間も耳の側で鳴ますから堪
 りません 深之丞イヤ夫が馬鹿くといふのた兎に角
 起て御屋敷内でも歩行て見て氣を晴すがよいハ 半之丞夫

でも無理おも奮發して起て見ませうト日陰は高く昇
 と頃漸々よ起出たまど猫は半之助が身よ添ふ如く兩
 親の前よて食事とする間も戸外へ出て人と話す間も
 耳元よて鳴く聲の煩はしさよ又次の夜も目睡まを第
 三日目よ至りてハ我が腹の中よて鳴く故よ終に一種
 の奇病とかりて食物も進まざ日増に身心衰弱して苦
 ひよぞ深之丞夫婦も一方からぞ心配して名ある醫師
 の診察を乞へば瘋癲かりとて逆上を下る薬と施し神
 佛の加持祈禱を頼めば祟物の所爲かりと雖も露程の

効験もあふりしかは暗き部屋の内うちに閉籠り腹はらを押へ
 て苦しみるるは實まことに不測ふしぎの奇病きびょうあれば親類しんるい中へも此
 事ことと報知しらせ看病かんびやう怠りたかりけり茲こゝに鹽谷家しんやがの藩士はんし岡
 野銀右衛門のぎんゑもんの此半このはん之助のすけが伯父おぢに當あたる病氣びやうき見舞みまひに來
 り委細わいさいの容よう躰たいと深しん之の丞夫じやうぶ夫婦ふうふに聞きて頻しきに點頭くわんとうさ才智さいち卓
 量りやうある者ものをかままば少すこしも怪あやしむ容よう子すかく半はん之助のすけが病床びやうしやう
 に來きり銀ぎんコレ半はん之助のすけ氣きと確たしかに持もつて此伯父このおぢが云いふ事ことを
 聞きかよ斯かいふ不測ふしぎを難病なんびやうに罹かつてい迎むかへも全快ぜんくわいと覺束たぼく
 ないゆゑ兼かて覺期かくきは忘わてゐるたらふが爰こゝの所ところを良よく

辨わへろ少年せうねんかりとて武士ぶしの悴せがれが獸けものの類たぐひひに魅み入いらる
 て可惜あたら命いのちを落おすなど、世よの聞きえは云いふ迄までもかく先ま
 祖その名なまでと穢けがれそのと遺憾いげんとは思おもはぬか半はん夫おぢの伯父おぢ
 さんの仰おほまでもなく猫ねこぐらわな魅み入いれて死しますのい
 如何いかにも殘念ざんねんで御座ござります銀ぎんサ、其殘念そのざんねんたと思おもふ了しやう
 簡かんがあるからば迎むかへも長生ながいきは出で來きぬ大病たいびやうゆゑ潔けよく苦
 痛くうを免まきて少すこし世間せけんの口くちの端はに懸かる耻辱ちじくの雪ゆきぎや
 うも有あふが能よく考かんへて見みるがよいと諭ごせは重おもき枕まくらを
 上あげ半はん潔けよく苦痛くうと遁かるるとのお諭ごは切腹せきはらしろと

仰しやる事か其儀と兼て小生も心付ては居ました
 兩親が嘸かゝ歎きませうと存知まして後々の事を考
 へ先立つ不孝の心苦しさに今日迄の黙止ました
 伯父さん迄が武士らしく切腹しろと仰しやる事から思
 ひ切て今晚彌々切腹致して相果ませう 銀「天晴な良
 覺期た彌々然いふ所存から兩親も已が話して明晩
 介錯をこに來て遣るかゝ思ひ遺る事のかいやうに書
 遺る事の微細に認め最期は臨むて未練らしくなく結
 髪をこ入湯かどして已が來るのを待がよいぞ 半「一々

承知仕りまして明日の日没頃より仰の通り支度を致
 して待申で御座りませう 銀「先それ迄を大事にさつ
 ちやまゝト銀右衛門の家内の者にも暇を告て歸りしが
 扱翌日の夜に入ければ今夜限りと潔よく覺期極め
 半之助の月代を剃髪を結ひ入湯して身を淨め待間程
 かく伯父銀右衛門は約束の通り介錯に來りて家内の
 者の立騒がん事を念ひ宵の間は深之丞が居間に居
 て話しかどと子中刻とも思ふ頃半之助が部屋に來
 り銀「見れば髪も結ひ入湯もして感心かよい覺期た最

早時刻もよからふから紋付の衣服を着て袴と着け兩親に今生の暇乞を致すがよいト衣服を着せ換へ手を探て親子一世の名残を惜む父母の歎きも絮々しけきは省きて記さねど看客宜く察し賜へ斯て又銀右衛門を半之助を部屋へ連れて戻り夏尙寒き氷の刃に白布を捲て小四方に乗せ膝の前は据て用意をと、のへ自身ハ刀の提緒を外して十字の斐どり禪とし明皎々たる長劍を閃りと抜て傍へに置き銀「イザ半之助覺期いかな半」伯父さんの御計らひで世の胡慮と成べき耻

辱を雪ぐの眞に嬉し御座ります此上は跡々の所を見苦しからぬやう願ひまゝと涙も溢さぬ雄々しき覺期に一禮を陳て諸裸ぬぎ透明るかと思ふぼりりの白き皮膚は突立んとする其手を擒へて銀「ヤレ待て半之助短見か最期乃際に云い聞すべき一事あり心を静めて承まはせと止むる伯父が一言は妖魔も怖る、勇士の金言畢竟這許に銀右衛門が如何なる絆を説出しつて甥が迷ひの難病を治せざるや否哉編と嗣て第百二十回の巻首に説べし

正史續いろは文庫 第二輯 畢
實傳

正史續いろは文庫 第三輯

○第百二十回

再説岡野銀右衛門は席を正して半之助に對ひ銀汝が
唯今切腹するの猫が腹よ入て絶え鳴く聲の聞える
故に苦しめらきて死ぬのではいか臨終の際よ至つ
て其仔細も心付を虚しく死とは遺憾ではいか今一
度心を静め魂ひと落付て腹の内猫の鳴く所をよく
聞まよし其聲のする所へ刀を突立てるがよいではいか
か其時已が介錯とてとらせるぞ半成程是は仰せの通

り腹の内はらで鳴なく所ところを突つ殺ころして遣やたふ御座ござります 銀ぎん「チ
 、然さう思おもふから腹はらを撫なてよく探たつて見みるがよい 半はん「ハテ
 今こん夕ゆまでも鳴なてた聲こゑが斷つ然ぜん聞きえませぬが何なにとも不ふ
 思し議ぎで御座ござります 銀ぎん「イヤ〜聞きえぬといふは逆さか上じやうと
 てゐるからで有あふ善よく氣きを落お付つて聞きがよいは 半はん「如何いか
 も唯ただ今いまの所ところでは鳴なく動どう静じやうも御座ござりませぬ 銀ぎん「フム然さうい
 ふ事ことから刀かたなを下したに置おいて裸はだをも入いれて零し時じ待まちて見みるが宜い
 からふ必かなず急せく事ことではないから狼ろう狽たいて犬いぬ死にを忘わさない
 やうにゐる己おれも一いつ服ふく喫くで侍まうと介かい錯さくの刀かたなを鞘さやに納なめ



第二十回

煙草盆を引寄せて半時餘り待つておたるが銀未だ猫
の聲は致さぬか半少しも鳴ませぬのは眞不思議
で成ません銀そんなら己は枕を借て爰に寐轉んで待
てゐるから寛くと腹を探つて見るがよいト褌を外し
て横に成り一時餘り目睡て又起直り銀半之助猫の鳴
く所は今以て分らぬか半へエ鳴さへすれば其所へ
直地に突立ませうと思つて居ますが今晚は如何致し
たのか一聲も聞えませぬ銀イヤ〜聞えぬ事はなか
らふ氣を落付て又待つがよいト再び枕を引寄せて待間

程ほどかく東ひがしも晷しちみ光み家や鶏とりの聲こゑ吻くちか爽つぎを告つげて夜よも朗さらかゝ明あけ渡わた
 りしかば銀ぎん右う衛ゑ門もんは身みと起おこし銀ぎんとろく猫ねこは鳴なむに
 しまつた哉や半はん一向いこうに聞きえませあんだト云いハ銀ぎん右う衛ゑ門もん
 は噴ふき飯だてて大おほきゝ笑わらひ銀ぎん猫ねこが鳴なねば死しも及およぶまいが
 向むか後ごとても詰つめらぬ事ことを氣きゝ懸かさへしかけまば何なにも恐おそ
 まる所ところをかい素もとより万ばん物ぶつの靈れいたる人にん間げんゝ獸じゅうの魅み入いる
 かと、いふ白たわ痴かた論ろんが有ある答こたもかゝ唯ただ已おれが女め々々しく
 狭せまい了ら簡かんから罪つみもかい者ものを殺ころした故ゆゑに怨うらみはせぬか夤つぎ
 縁つぎはしまいりと無む用ようか心こゝろ配はいをする爲ために神しん經けいを惱なまし

て神しん經けい病びやうを引ひ出だし我われから猫ねこゝ夤つぎ縁縁まで不ふ治ちの難なん病びやうと
 釀かすとは馬ば鹿かくとい事ことではかいが怪あやみを視みて怪あやし
 まさまハ怪あやしき者ものはかいと云いふ諺ことわざの通とほり汝ても武ぶ士しの
 子こで有ありながら猫ねこに怖おそえて煩わづらふなど、は餘あまり圍い九く字じの
 ない話はなした向むか後ごは屹きつ度と氣きをつけて神しん經けい病びやうを引ひ起おこすか
 と懇ねん篤とくに異い見けんを加かへ歸かへりし後のちは大病たいびやうも拭ぬふが如ごとく
 に全ぜん快くわいして學がく問もんを勵はげみ智ち識しを開ひらいて大だい丈さう夫ぶと成なる
 は伯お父ち銀ぎん右う衛ゑ門もんが賜たま物ものなりと両りやう親しんが喜よろこ悦こひ大おほかたか
 らぞ如ごとくも賢かこき計はからひ成なると世よの評ひやう判はんも高たかかりと